V　考察

(1)富山市打出遺跡の道路跡

安達志津

Ⅰ　打出遺跡の道路跡の特色と性格

他遺跡の道路跡と比較検討し、この道路跡の性格を考えてみたい。

①直線道である。②N-41～44°-Wとほぼ正確に北西―南東方向と斜方位をとる。③道路幅は側溝心々間で5.5～6.5mで、ほぼ6mである。④側溝は幅0.35～0.9m、深さ0.1～0.35mで、3回以上の掘り直しが認められる。溝の深さは一定ではなく、部分的に深いところがある。また、溝が途切れている箇所もある。北側は削平のため、深い部分だけが遺存している場合もあると考えられる。

①については、近年の道路研究によって、駅路は平野部では直線コースをとること、郡衙を結ぶ伝路でも直線である例が近年報告されているという[1]。

③の6mの道路幅について検討を加えてみよう。駅路と考えられる発掘例では、8世紀代では10m以上が多く、9世紀に入ると9m、あるいは6mに改変されてくる事が明らかになってきている。石川県津幡町加茂遺跡では、奈良時代初めに構築された幅9mの道路跡が、9世紀前半に幅6mに改修されている。これらは古代北陸道とされている。小矢部市桜町遺跡で発見された道路跡も古代北陸道と推定されているが（伊藤1995)、幅は側溝心々間で5.5～6mある。時期については8世紀中頃以降との新しい見解が出されている（小矢部市教委2003)。また、先に挙げた伝路と見られる道路跡の例などから、打出遺跡の道路跡は少なくとも伝路以上の格の官道といえる。

④の側溝の規模については、後世の削平のため、当時の上幅や深さはわからないが、加茂遺跡の古段階の道路側溝の幅1.5mと比べると規模が小さい。桜町遺跡では0.6～0.7mと打出遺跡と大差はない。複数回の掘り直しが認められる点は加茂遺跡でも同様であり、構築されてから完全に埋まりきるまでは、溝さらいや、掘り直しが行われ、管理されていた状況が読み取れる。

溝の深さが一定ではなく、ところどころ途切れている点については、排水用としては用を成さないように思われる。早川泉氏は東山道武蔵路の側溝が、長さ1.5～21m、幅0.4～1.4m、深さ0.5～0.8mの細長い土坑を連結したものであったことから、「土坑連結式掘削工法」と呼称し、古代における溝掘

削のための土木技術工法と認識した。そして、この溝が排水用ではなく、道路を区画するための溝と考えた（早川1997）。打出遺跡の道路跡の側溝もこの工法によって掘削されたと考えられる。

Ⅱ　道路跡の延長線上にあるもの

打出遺跡の道路跡はどことどこを結ぶ道だったのだろうか。南東方向の延長線をみてみると、昭和27年に米軍によって撮影された空中写真に、旧河川の縁を通るようにして細長い地割りが続いているのがみえる。これが道路の痕跡である。そのまま南東方向へ向かうと、今市の集落の東端あたりで旧神通川（古川）にぶつかる。ここで、神通川を渡ったと考えられる。古川知明氏作成の神通川流路の復元図をみると、この地点はこれより上流、下流で分岐して大きく蛇行する神通川各流路が１本にまとまり、微高地が左右から張り出している地点で、渡し場としては最適であった。旧神通川を渡った後は東へ向かうと千原崎遺跡を通り、蓮町遺跡、米田大覚遺跡がある。

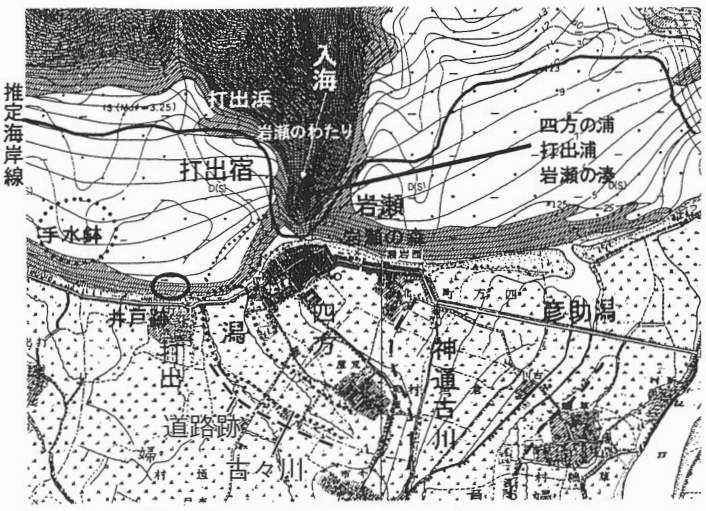
米田大覚遺跡では、奈良時代後半から平安時代前半の掘立柱建物30棟以上、木組井戸２基を含む井戸９基、溝などが見つかっている。掘立柱建物には５間×４間の庇付きの大型建物や、２間×２間の総柱の倉庫と考えられる建物が含まれる。遺物は、奈良時代半ば～平安時代前半（８世紀中葉～10世紀前半）に属する須恵器、土師器、緑釉陶器、製塩土器、200点以上の墨書土器、石帯、斎串などが出土している。遺物の主体を成すのは９世紀中頃に属するものである（富山市教委　鹿島昌也学芸員教示）。特に注目されるのが、「井」、「桑」（旧字体）、「真」、「道公？」、のほか、則天文字の「天？」などの文字が記された墨書土器、六位以下の役人が身につけた黒色の粘板岩製巡方、丸鞆の帯飾り、29点の斎串である。

第１図　打出遺跡の道路と周辺の遺跡
（網掛けは奈良・平安時代を含む遺跡、10万分の１）

これらの遺構、遺物のあり方から、米田大覚遺跡は官衙的な性格が考えられている。藤田富士夫氏は、「大荊荘開田図」、「丈部荘開田図」の分析から、この米田大覚遺跡が、８世紀半ばにはすでに移転していた新川郡衙の新転地だとしている（藤田・小林2004）。また、米田大覚遺跡の南方1.2kmに位置する豊田大塚・中吉原遺跡からは人面墨書土器３点、人形４点、斎串１点が出土している。堀沢祐一氏は人面墨書土器と木製祭祀具を使った祭祀は郡家との結びつきが強い祭祀だとしている（堀沢2001）。

反対に北西方向に向かえば海につきあたることになるが、海岸付近の村落に向かう道にしては、立派過ぎる道路である。海岸沿いに東西に走る近世の浜街道に当たる海岸ルートがあったと考えるのが自然ではないだろうか。国府と富山湾の海岸線は海岸侵食のため、年々南下しており、奈良～平安時代には現在より１～２km北にあったと推定されている。延徳三年（1491年）に京都の令泉為広が越後に下向した際のことを記した「越後下向日記」によると、一向は放生津を発ち、「アラヤ、エビエ、メウシン橋、ネリアヒ、イハウ、アシアラヒ里、ウチデ里、シバクサ、ヨカタ里、イハセ渡、大河アリ、里カミイハセ…」と放生津潟の砂洲上を東に通っている。海老江と明神橋の順が逆であると思われるが、当時放生津以東の放生津潟の吐川が小河川で橋が架けられており、放生津から四方までの間に大河は無く、安定した道のりであったことがうかがえる。神通川の流路の変遷については、古川知明氏や、中世岩瀬湊研究グループの研究に詳しい。中世前期頃は打出と四方の間を流れており（古古川、間の川）、中世後期に神通古川へ移ったとされている（中世岩瀬湊研究グループ2005）。その後は近世の史料によって、神通川本流が万治三年（1660年）～寛文八年（1668年）にかけての氾濫で、本流は東岩瀬の西に移ったことが明らかである。西岩瀬は洪水で家々が流され、本流が変わったことで港としての用を失い、衰微していった。古川氏らは、室町時代の『廻船式目』にある三津七湊のひとつ「越中岩瀬湊」は西岩瀬に所在したと推定している。沿岸海域土地条件図によれば四方の先は深い洋谷になっており、湊には最適であった。『貞享年中四方岩瀬濱繪圖』にも四方北方に「此所大船共掛リ申舟溜和合」とある。古代の地理的環境は定かではないが、16年度調査Ａ地区（河川部分）の自

然科学分析では弥生・古墳時代より後は、河川湖が存在し、時折洪水の影響も受けているという。四方西岩瀬地区は中世以前にも、渡しの機能の他に湊としての機能を有していたと考えられるのではないだろうか。古代北陸道の駅家が水運と強い関係を有していたことは、木下良氏、金坂清則氏ら多くの研究者によって明らかにされてきており、A地区で石製丸鞆が発見されていることは示唆的である。

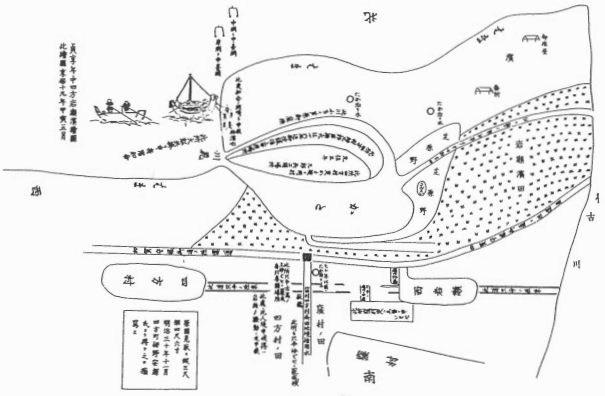


第２図　伝承からみた古地形の復元案
（古川知明氏作成図に一部加筆、古川2005bより）

Ⅲ　北陸道の復元

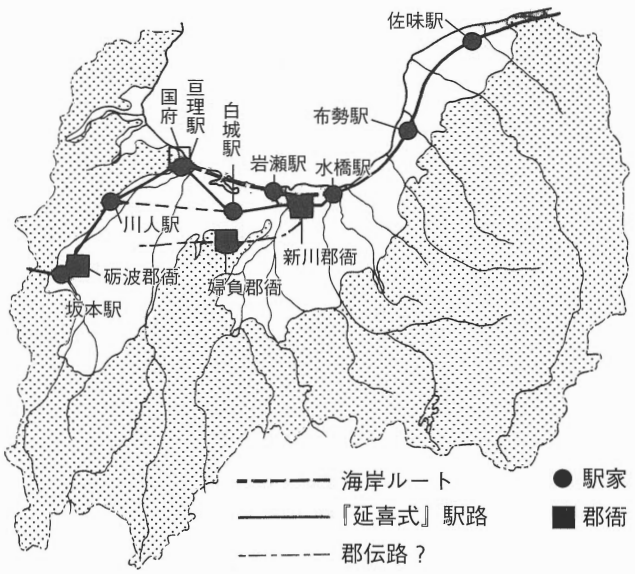
少なくとも平安時代の初めにおいて、海岸ルートが存在した可能性を指摘したが、このルートはどのような性格をもつ道であったのだろうか。

『延喜式』記載の駅名のうち、亘理駅家は国府付近の小矢部川・庄川両河口付近に位置していたと考えて間違いない。次の白城駅家は旧下村・小杉町の白石、小白石付近と考えてよいと思われる。旧新湊市の放生津潟の南側の「作道」の地名や、延喜式内社道神社があることから、延喜式当時放生津潟を南に迂回するルートの北陸道が存在したと考える。しかし、先に指摘した海岸ルートも、北陸道と認識されていた時期があった可能性がある。越中国では川人駅から水橋駅までの間の駅間距離が短いことが従来から指摘されているが、亘理駅から海岸線づたいに岩瀬駅に直接向かったとすると、両駅間の距離は西岩瀬まで約14km、蓮町まで17km、東岩瀬まで約16kmと、ほぼ令の規定通りとなる。白城駅から水橋駅までも直線距離で約14kmとなり、ほぼ令の規定に沿う。岩瀬駅と白城駅はもともと別路線の駅であった可能性が考えられるのである。地域の実情とは無関係になるべく直線的に最短距離で国と国を結ぶという律令制当初の駅伝制の性格からすると、海岸ルートのほうが駅路としてふさわしいと考えられる。木下氏は、越後国柏崎以北の北陸道について、海岸ルートが駅路で、古志郡衙とされる八幡林遺跡を通る内陸ルートは郡衙を連絡する伝路であろうとしている。また、『延喜式』当時には駅路と伝路の区別が曖昧になって、伝路のほうに吸収されたとみられるところが多いので、『延喜式』駅伝路は内陸ルートになっていたかもしれないと述べている（木下1995）。越中国でも同様のことが言えるのではないだろうか。放生津の南側を通るルートは射水・婦負両郡の重要な施設と考えられる北高木遺跡、荒畑遺跡、太閤山Ⅰ遺跡、黒河尺目遺跡、栃谷南遺跡などの主要遺跡に近いことから、海岸ルートよりも伝路的性格をもっていると考えられるのである[2]。しかし、厳密な意味での伝路はさらに内陸寄りのこれらの遺跡を通るようなルートであった可能性がある。最近、西井龍儀・小林高範両氏によって呉羽山古道の存在が明らかにされ、主要地方道富山・戸出・小矢部線から呉羽山古道に連なる官道の存在を指摘された。この道は伝路にあたるものであろう。8世紀の後半から9世紀の初めにかけて、全国的に駅路の改変が行われている。より地方の実情にあったルートをとり、無駄なルートや駅家を廃し、道幅を縮小している。恐らく越中でもこの時期に海岸ルートの駅路は廃され、実情にあった内陸ルートがとられるようになったのであろう。本来ならその時点で岩瀬駅は廃されるべきであるが、大河の渡しと湊という重要な役割を担っていたこと、岩瀬駅から水橋駅までの間は、神通川・常願寺川の氾濫原で通行が困難な区間である



第３図　貞享年中四方岩瀬濱繪圖

ことから継続して置かれたのではないだろうか[3]。海岸ルートにおける岩瀬駅は西岩瀬付近に比定しておきたい[4]。内陸ルートになってからはやや上流の蓮町遺跡あたりに場所が移された可能性も考えられるが、今後の発掘事例を待って考えていきたい。内陸ルートの駅路がとられた後も東との往来や、冬季の積雪を考えると海岸ルートは重要な道であったと考えられ、打出遺跡で見つかった道路跡は海岸ルートと『延喜式』駅路との連絡道、海岸ルートから新川郡衙（米田大覚遺跡）に向かうための国府と郡衙を結ぶ道であったと考えられる。



第４図　北陸道の復元

註

(1)木下氏は、三重県安芸郡安濃町荻野で発掘された幅4.5mの直線道を安濃郡家への伝路、群馬県藤岡市上栗須寺前遺跡の内幅5.5mの東西道を多胡郡家への伝路であろうとしている（木下1992）。

(2)川人駅に比定されている麻生谷遺跡から白石付近までは約17kmで、久々忠義氏の指摘されるように国府へ向かわずに、中保Ｂ遺跡や、東木津遺跡など射水郡の重要施設を通って内陸ルートへ向かうルートも考えられそうである（久々2004）。

(3)岩瀬駅と水橋駅の間は、同様の理由により８世紀段階から短かったと考える。

(4)この道路跡の南西側にある「今市」という地名も気になるところである。出越茂和氏は湊には市が成立する事が多いことを常陸国高浜市や備後国深津市の例などから述べられ、加賀郡の郡津である金沢市戸水大西遺跡出土の「大市」「市□」の墨書土器から市の存在を予想している（出越2000）。今市遺跡からは９世紀の須恵器など古代の土器が出土している。

引用文献

柿田祐司　2000　「石川県津幡町加茂遺跡について～道路遺構を中心に～」『フォーラム　古代の道と駅』　富山市教育委員会

伊藤隆三　1995　「古代北陸道の発掘調査－富山県小矢部市桜町遺跡-産田地区－」『古代交通研究』第４号pp.81-85　古代交通研究会

小矢部市教育委員会　2003　『桜町遺跡発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』第１分冊

金坂清則　1996「北陸道－その計画性と水運との結びつき－」『古代を考える　古代道路』　吉川弘文館

木下　良　1992「古代交通研究上の諸問題」『古代交通研究』創刊号　pp.2-30　古代交通研究会

木下　良　1995「古代の北陸道」『北陸道の景観と変貌』　古今書院

木下　良　1996「古代道路研究の近年の成果」『古代を考える　古代道路』　吉川弘文館

久々忠義　2004「富山県内の古代道路遺構について」『フォーラム　奈良時代の富山を探る』pp.46-51　富山市教育委員会

高島英之　2004「上野国」『日本古代道路事典』pp.158-169　八木書店

高岡　徹　2002「古代・中世のころ」『萩浦郷土史』pp.36-73　萩浦自治振興会

中世岩瀬湊調査研究グループ　2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第33号　富山市日本海文化研究所

出越茂和　2000「金沢における古代津湊の成立と展開」『戸水遺跡群Ⅱ　戸水大西遺跡Ⅰ』pp.187-196　金沢市教育委員会

西井龍儀・小林高範　2005「呉羽古道の調査」『大境』第25号　pp.143-154　富山考古学会

早川　泉　1997「古代道路遺構の虚像と実像－東山道武蔵路の調査を通して－」『古代交通研究』第6号　pp.21-37　古代交通研究会

藤田富士夫・小林高範　2004「富山市米田大覚遺跡の調査と意義」『東岩瀬郷土史会会報』No.93　pp.１-12　東岩瀬郷土史会

古川知明　2005a「神通川底出土遺物のこと」『－草島6000年の歴史－　草島校下の歴史』第50号　pp.１-９　草島校下郷土史会

古川知明　2005b「中世岩瀬湊を探る－海底構造物の探査から－」第22回　全国和船研究発表会資料

保科齋彦　2002「江戸時代の萩浦」『萩浦郷土史』pp.74-127　萩浦自治振興会

堀沢祐一　2001「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『フォーラム　古代北陸の国と郡の成り立ち』pp.20-32　富山市教育委員会

(2)打出遺跡の竪穴住居について

鍋谷仁美

Ⅰ　打出遺跡の住居

本遺跡では平成15・16年度発掘調査により、竪穴住居13棟・掘立柱建物１棟を確認した。SD313・329・340は周溝状遺構と報告したが、その年代や立地場所から平地住居の可能性もある。平地住居は地表面に設けられた生活面の周りに溝を巡らす建物であり、富山県域では、下老子笹川遺跡・浦田遺跡等で検出されている。下老子笹川遺跡では小屋的な建物と考えられている。SD313・329・340はかなり削平を受けて遺存状態が悪いことから、今回は竪穴住居のみを検討対象とする。竪穴住居の時期は弥生時代後期後半（法仏Ⅱ式期）～古墳時代前期（高畠式期）である。

以後、平成15年度調査区の住居をSI1～５、平成16年度調査区の住居をSI01～08と表記する。

１．富山県域における弥生時代後期後半～古墳時代前期竪穴住居の分類（表１）

平面形は、円形・方形・隅丸方形・隅丸長方形または長方形の４つに分類できる。

Ａ類　平面形が円形の住居で、不整円形や楕円形も含む。打出遺跡では確認されていない。

Ｂ類　平面形が方形の住居である。打出遺跡の場合、長方形に近い方形。月影Ⅰ式～白江式期の５棟（SI1～５）が該当する。

Ｃ類　平面形が隅丸方形の住居である。打出遺跡では、法仏Ⅱ式～高畠式期の７棟（SI01～03・05～08）が該当し、最も多い。

Ｄ類　平面形が長方形または隅丸長方形の住居である。打出遺跡では、月影Ⅱ式期の１棟（SI04；隅丸長方形）のみが該当する。残存部分から平面形を推測した。報告では北東辺・南東辺が平行しないことから五角形の可能性も否定できないとした。

このうえで、Ａ～Ｄ類を小型住居（直径または辺が３～５m）、中型住居（直径または辺が６～８m）、大型住居（直径または辺が９m以上）と細分する。他遺跡では床面積が報告されていないことが多いため、次善の策として長軸で分類した。打出遺跡にはＢ類小型住居（SI1～５）、Ｃ類小型住居（SI02・03）・中型住居（SI01・06～08）・大型住居（SI05）、Ｄ類大型住居（SI04）がある。SI05は本来中型住居にあてはまるが、大型住居のSI04より床面積が大きいことを考慮し、大型住居とする。

表１　平面形と規模による分類（打出遺跡）

平面形	小型住居	中型住居	大型住居	計
A類	0	0	0	0
B類	5	0	0	5
C類	2	4	1	7
D類	0	0	1	1
計	7	4	2	13

打出遺跡の竪穴住居はＢ・Ｃ類主体で、それらは住居検出範囲の西側と東側にわかれて分布する。Ｂ類は西側（平成15年度調査区）に集中し、Ｃ類は東側全域（平成16年度調査区）、Ｄ類は平成16年度調査区の南側に分布する（図１）。小型・中型住居が多く、大型住居は稀である。小型・中型住居の割合は全体で７：４（小：中）となり、小型がやや多い。Ｂ類が小型住居、Ｃ類が小・中・大型住居の組み合わせ、Ｄ類が大型住居という傾向がある。また、Ｃ類は集落形成期間中常に存在するが、Ｂ・Ｄ類は一定期間出現するにすぎない。月影式期だけが２～３種類の平面形を採用していたことになる。

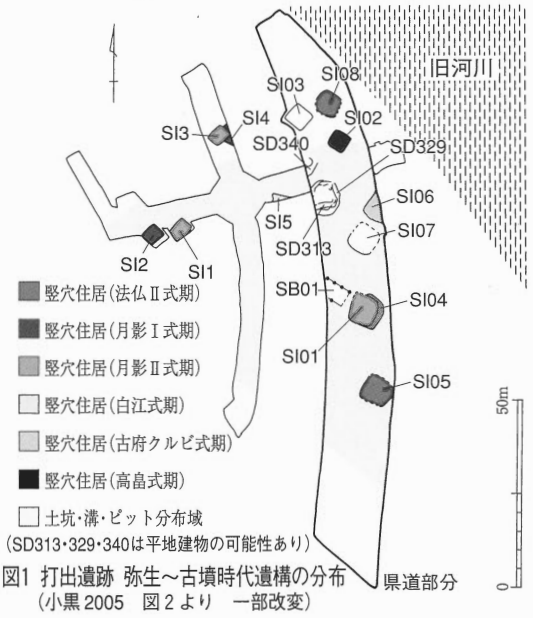


図1 打出遺跡 弥生～古墳時代遺構の分布
（小黒 2005　図２より　一部改変）

２．住居構造

①柱穴　Ｂ・Ｄ類では主柱が確認されていないが、存在しないのか認識できなかっただけなのかは明確でない。Ｃ類は７棟中６棟で主柱が確認された。その数は４本（SI01～03・05）が多く、他に５本（SI07）もある。SI06は３本しか確認されていないが、配置から３本以上の主柱が存在すると考えられる。

②炉　炉をもつのは13棟中５棟（SI1～３，SI01・05）、加えて２棟（SI02・06）で炉をもつ可能性が

示唆されている。また、すでに床面が削平されている可能性から認識できなかった場合や他の遺構との重複が激しくわからなかったため確認できなかった例が３棟ある。設置場所はほぼ中央に４棟（うち炉の可能性を示唆するもの１棟）、中央から何れかの方向へ寄るものが２棟ある。もう１棟は設置場所不明のため除外した。住居の規模や平面形、他の施設との関係性は特に見受けられないが、Ｂ類で４本の主柱をもつ住居の場合、炉はほぼ中央に位置する例が多い。

③壁溝　壁溝のあるSI1・２，SI01～04・06～08と壁溝のないSI3～５，SI05にわかれる。Ｂ・Ｃ類では両方確認されているが、Ｄ類は壁溝のある住居しか確認されていない。壁溝の有無と立地場所に明確な関係はみられないものの、北西端のSI3と南東端のSI05を結ぶ北西－南東ラインに壁溝のない住居が並ぶ。

３．長軸方向と時期（表２）

長軸方向は、法仏式～月影式期にかけて南北に傾き、白江式期になると法仏式～月影式期以上に東西に傾く。そして、古府クルビ式・高畠式期で再び南北に傾き法仏式～月影式期と様相を同じくする。法仏Ⅱ式期は２棟（SI05・08）でN-60～63°-Wである。月影Ⅰ式期はN-51°～62°-Wで若干のずれがみられる。２棟（SI2・４）検出された。月影Ⅱ式期は最も多い４棟（SI1・3，SI01・04）でN-49°～67°-Wと幅がある。SI01を除く３棟はN-49°～55°-Wに収まるのに対し、SI01はN-67°-Wとずれが大きく、一棟だけ異質な感じがする。白江式期のSI5はN-78°-Wで、これまでと角度が大きく異なるという特徴をもつ。古府クルビ式期は１棟（SI06）でN-54.5°-W、高畠式も１棟（SI02）でN-59°-Wであった。白江式期は例外として傾向を検討すると、時期毎に多少の変化はみられるもののN-50～60°-W付近を行き来し、ほとんど方向は変わらない。

表２　長軸方向と時期

時　期	遺構名	軸方向
法仏Ⅱ式期	SI05	N-63°-W
	SI08	N-60°-W
月影Ⅰ式期	SI2	N-51°-W
	SI4	N-62°-W
月影Ⅱ式期	SI1	N-54.5°-W
	SI3	N-49.5°-W
	SI01	N-67°-W
	SI04	N-49°-W
白江式期	SI5	N-78°-W
古府クルビ式期	SI06	N-54.5°-W
高畠式期	SI02	N-59°-W
月影Ⅱ式～古府クルビ式期	SI03	N-49.5°-W
法仏Ⅰ式～古府クルビ式期	SI07	N-56°-W

また、１・２棟しか検出されなかったものはデータの信頼性が低く、月影式～古府クルビ式期にはそれほど変化はないのだが、各時期の長軸方向に若干違いがあることが判明した。SI03・07は時期を特定できなかったため、報告では時期に幅をもたせている。この時期が不明確な２棟を長軸方向で判断し、どの時期に属するかを断定はできないが可能性の一つとして検討する。SI03（月影Ⅱ式～古府クルビ式期）は月影Ⅱ式期に、SI07（法仏Ⅰ式～古府クルビ式期）は月影式期または古府クルビ式期にあてはまる。ただし、同じ中型住居で比較した場合、規模は月影式期に近い。古府クルビ式期の遺物は壁溝内の上方から出土していることも考慮すると古府クルビ式期まで下らない可能性もある。

４．竪穴住居の特徴

時期を特定できる資料から、以下の特徴がうかがえる。法仏式期には中・大型住居が確認されているが、月影式期になると小型住居が新たに加わり、小・中・大の規模が存在するようになる。中型住居は法仏式～月影式期にかけて大型化し、大型住居の辺は長くなる。大型住居は２棟確認されただけで、小型住居の方が多い。白江式～高畠式期は１棟ずつしか検出されていないが、大型住居は確認できず、小・中型住居のどちらかになる。中型住居では月影Ⅱ式～古府クルビ式期にかけて小型化する傾向がある。平面形と住居規模の関係も考慮すると、月影式期は平面形も規模も種類が増え、集落の最盛期であったことがうかがえる。北西から南東に向かい小型住居→中型住居→大型住居と立地する。

また、時期毎に立地範囲が異なる。法仏式期は住居検出範囲の最北端と最南端に位置し、立地場所が分散するのは法仏式期に限られる。月影式期は西側～中央に集中し、月影Ⅰ式期は住居検出範囲の中央から西側に、月影Ⅱ式期は中央を中心とした広い範囲に分布する。この時期には同じ位置で建替えが行われており、生活するのに良好な場所だったと考えられる。白江式～高畠式期は中央からやや北東の範囲に分布し、住居の分布は月影式～高畠式期にかけ西から東へと移る。

Ⅱ　富山県域における弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居（表３）

住居の平面形・規模は基本的に各報告書に従い、平面形は筆者分類にあてはめた。弥生時代末期・最終末は終末期と判断、規模は長軸方向をもとに分類し、長軸・短軸または一辺の長さを記した。遺

構が調査区外へ続く場合は検出長を、推定規模の記載があればそちらを使用している。検出長を使用した際は規模欄に以上と付け加えた。

表３　富山県域における弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居

市町村名	遺跡名	遺構名	平面形	規　模	時　期
魚津市	佐伯		円形	直径約9.3m	弥生時代終末期～古墳時代初頭
上市町	砂林開北	第１号住居跡	隅丸方形	一辺約5.5m	弥生時代終末期
		第４号住居跡	隅丸方形	一辺7.5m	古墳時代初頭
		第５号住居跡	隅丸方形	一辺約5.5m	弥生時代終末期～古墳時代初頭
		第６号住居跡	方形	一辺約７m	古墳時代初頭
		第７号住居跡	方形	一辺４m	弥生時代終末期～古墳時代初頭
舟橋村	竹内東芦原	SI01	方形	6.7m	古墳時代後期
		SI02	円形	直径約8.6m	弥生時代後期（法仏式期）
		SI03	方形		古墳時代前期
		SI04	方形	5.9m	古墳時代前期（白江式期）
	仏生寺城跡	SI01	隅丸方形	長軸４m、短軸3.8m	古墳時代初頭
		SI02	隅丸方形	長軸2.8m、短軸1.6m以上	古墳時代初頭
立山町	利田横枕（中央西区）	SI01	隅丸方形	一辺約5.3m	古墳時代前期（古府クルビ式後半）
		SI02	隅丸長方形	長軸約4.8m、短軸約3.5m	古墳時代前期（古府クルビ式後半）
		SI03	隅丸方形	長軸約5.3m、短軸約5.2m	古墳時代前期（古府クルビ式後半）
		SI04	隅丸方形	長軸約4.4m、短軸約4.0m	出土遺物が少なく正確な時期不明
		SI05	隅丸長方形	長軸約4.5m、短軸約3.6m	古墳時代前期（古府クルビ式後半）
		SI06	楕円形	長軸3.3m以上、短軸2.8m	古墳時代前期（古府クルビ式後半）
		SI07	隅丸長方形	長軸約6.8m、短軸約5.8m	古墳時代前期（高畠式期）
	辻	SI01	隅丸長方形	長軸4.3m、短軸3.5m	弥生時代後期
富山市（旧婦中町）	千坊山	SI01	隅丸長方形または長方形	長軸８～９m、短軸７～８m	弥生時代終末期（月影Ⅰ式期）
		SI02	隅丸長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期（月影Ⅰ式期）
		SI03	隅丸長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期（月影Ⅰ式期）
		SI04	円形	直径11.5m	弥生時代終末期（月影Ⅱ式期）
		SI06	円形	直径８～11.5m	弥生時代終末期（月影Ⅱ式期）
		SI07	隅丸長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期
		SI08	長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期
		SI09	長方形	長軸８～９m、短軸７～８m	弥生時代終末期
		SI11	隅丸長方形または長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期（月影Ⅱ式期）
		SI12	隅丸長方形	長軸８～９m、短軸７～８m	弥生時代終末期
		SI14	隅丸長方形または長方形	長軸８～９m、短軸７～８m	弥生時代終末期
		SI15	円形	直径８～11.5m	弥生時代終末期（月影Ⅱ式期）
		SI17	隅丸長方形または長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期
		SI18	長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期
		SI19	円形	直径８～11.5m	弥生時代終末期（月影Ⅱ式期）
		SI20	隅丸長方形	長軸８～９m、短軸７～８m	弥生時代終末期
		SI25	長方形	長軸５～6.5m、短軸４～５m	弥生時代終末期（月影Ⅰ式期）
	南部Ⅰ（1998年）	SI01	円形	直径約8.4m以上	弥生時代終末期（月影Ⅱ～白江式）
	（2000年）	SI01	隅丸方形	一辺約６m	古墳時代前期（高畠式期）
	鍛冶町（A区）	SI15	隅丸方形	一辺約６m	月影Ⅰ式期
	（B区）	SI908	隅丸方形	一辺６m	月影Ⅱ式期
		SI745	隅丸方形	一辺約８m	白江式期
射水市（旧小杉町）	中山南	第１号住居址	長方形	長軸９m以上、短軸５m以上	古墳時代初頭
		第２号住居址	不整楕円形	長径14m、短径10m	古墳時代初頭
		第３号住居址	円形	直径約13m	古墳時代初頭
		第４号住居址	隅丸方形	長軸9.5m、短軸8.2～9.5m	古墳時代初頭
		第５号住居址	隅丸長方形	長径４m、短径３m	古墳時代初頭
		第６号住居址	隅丸長方形	長径５m、短径４m	古墳時代初頭
		第７号住居址	円形	直径10m	古墳時代初頭
	（第２台地）	第１号住居址	隅丸方形	一辺約９m	古墳時代初頭
	中山中	SB01	不整円形	直径10m	弥生時代末～古墳時代初頭
高岡市	下佐野（井波地区）	SI01	隅丸方形	長軸7.35m、短軸7.1m	弥生時代後期
		SI02	隅丸方形	長軸5.2m、短軸4.75m	弥生時代後期
		SI03	隅丸方形	長軸7.25m、短軸7.1m	弥生時代後期
	下佐野（横田地区）	SI04	隅丸方形	長軸５m以上、短軸４m以上	弥生時代後期
	下老子笹川（B３地区）	SI01	隅丸方形	４m×２m	弥生時代後期前半～後半
		SI03	隅丸方形	3.2m×2.4m	弥生時代後期前半～後半
		SI05	隅丸方形	4.2m×２m	弥生時代後期前半～後半
小矢部市	平桜川東	第１号住居跡	長方形	長軸6.6m、短軸4.6m	古墳時代初頭
		第２号住居跡	隅丸方形	長軸4.38m、短軸3.5m	古墳時代初頭
	杉谷内床ノ山			3.6m×3.1m	弥生時代末期

当該期の住居は、中新川郡立山町利田横枕遺跡、富山市（旧婦中町）千坊山遺跡、射水市（旧小杉町）中山南遺跡でまとまって検出されている。C・D類が目立つが、D類は検出数の多い千坊山遺跡の主な平面形であることから、千坊山遺跡のみの特徴である可能性もある。A類も千坊山遺跡に多い。また、住居が４棟以上検出されている遺跡ではA類を１棟以上含む傾向がある。打出遺跡では13棟検出しているので、確認されていないだけでA類が存在してもおかしくない。C類はほとんどの遺跡で１棟以上認められるが、B類はわずか５棟にすぎなかった。遺跡毎でみると、数種類の平面形が同時期に認められる遺跡（利田横枕・中山南遺跡等）もあれば、同時期または数時期に渡って一つの型式の住居で構成される遺跡（下佐野・鍛冶町遺跡等）もある。

1．平面形と規模による分類（表４）

Ａ類は大型住居、Ｃ・Ｄ類では小・中型住居が断然多い。なかでもＣ類は小型住居、Ｄ類は中型住居が主である。打出遺跡ではＢ類：小型、Ｃ類：中型、Ｄ類：大型住居が主で、富山県域全体の傾向とは異なる。富山県域全体の規模の割合は21：22：16（小：中：大）で小・中型住居が多いのは打出遺跡と同様である。しかし、大型住居の占める割合は大きい。

表４　平面形と規模による分類（富山県域）

平面形	小型住居	中型住居	大型住居	不明	計
A類	1	2	9	0	12
B類	2	2	0	1	5
C類	13	7	2	0	22
D類	5	11	5	0	21
計	21	22	16	1	60

2．住居規模の移り変わり（表５）

表３から時期が明確に記載されている住居を集めた。法仏式期では中型住居のみであったが、月影Ⅰ式期になると大型住居も出現し、規模は２種類になる。白江式期では、月影式期と同様に２種類の規模が確認できるが、小・中型住居に変わる。古府クルビ式期では小型住居、高畠式期では中型住居が存在し、規模は１種類へと減少する。時期が明確なものに限定したため遺跡に偏りがみられるが、法仏式～月影式期にかけて大型化し、白江式期に入ると小型化する傾向がある。平面形は法仏式期にＡ類のみ、月影Ⅰ式期はＣ・Ｄ類、Ⅱ式期にはＡ類が加わる。白江式期はＢ・Ｃ類、古府クルビ式期はＡ・Ｃ・Ｄ類、高畠式期にはＣ・Ｄ類が確認でき、月影Ⅱ式期・古府クルビ式期で最も多い３種類の平面形が存在する。

打出遺跡の特徴と比べると大型化・小型化する時期は類似し、月影式期に平面形・規模が多様化するという共通点がある。打出遺跡の竪穴住居は、富山県域における他遺跡とほぼ同様の変遷を辿ることが明らかになった。

表５　住居規模の移り変わり

時期	平面形	小型	中型	大型	計	該当遺跡名
法仏式期	A類		1		1	竹内東芦原遺跡
	B類					
	C類					
	D類					
月影Ⅰ式期	A類					
	B類					
	C類		1		1	鍛治町遺跡
	D類		3	1	4	千坊山遺跡
月影Ⅱ式期	A類			4	4	千坊山遺跡
	B類					
	C類		1		1	鍛治町遺跡
	D類		1		1	千坊山遺跡
白江式期	A類					
	B類	1			1	竹内東芦原遺跡
	C類		1		1	鍛治町遺跡
	D類					
古府クルビ式期	A類	1			1	利田横枕遺跡
	B類					
	C類	2			2	利田横枕遺跡
	D類	2			2	利田横枕遺跡
高畠式期	A類					
	B類					
	C類		1		1	南部Ⅰ遺跡
	D類		1		1	利田横枕遺跡
計		6	10	5	21	

引用・参考文献（下記以外はⅠ～Ⅲの引用・参考文献（88・89ページ）と同じ）

小黒智久（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）　2005「日本の遺跡・世界の遺跡　富山県打出遺跡」『考古学研究』第52巻第１号（通巻205号）pp.108-111　考古学研究会

小矢部市教育委員会　1979　『平桜川東遺跡発掘調査概要』

小矢部市教育委員会　1980　『平桜川東遺跡Ⅱ』

上市町教育委員会　1998　『富山県上市町　砂林開北遺跡発掘調査概報』

小杉町教育委員会　1991　『小杉町中山中遺跡発掘調査概要』

（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1997　「下老子笹川遺跡」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』pp.5～35

高岡市教育委員会　1992　『市内遺跡調査概報Ⅰ－平成３年度，石塚遺跡，下佐野遺跡－』pp.33～49

高岡市教育委員会　1993　『市内遺跡調査概報Ⅱ－平成４年度，下佐野遺跡，間尽遺跡－』pp.1～10

立山町教育委員会　1987　『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』

立山町教育委員会　2001　『利田横枕遺跡』

富山県教育委員会　1971　『小杉町中山南遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会　1979　『富山県魚津市　佐伯遺跡発掘調査概要』

長瀬　出　2002　「富山県における弥生集落の展開」『富山考古学研究』紀要第５号　pp.1-14　（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

婦中町教育委員会　1995　『千坊山遺跡(1)』

婦中町教育委員会　1998　『富山県婦中町　南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』

婦中町教育委員会　2000　『富山県婦中町　南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』

婦中町教育委員会　2002　『千坊山遺跡群試掘調査報告書』

婦中町教育委員会　2003　『富山県婦中町　鍛治町遺跡発掘調査報告』

舟橋村教育委員会　2000　『富山県舟橋村　浦田遺跡発掘調査報告(3)』

舟橋村教育委員会　2001　『富山県舟橋村　仏生寺城跡発掘調査報告』

舟橋村教育委員会　2002　『富山県舟橋村　竹内東芦原遺跡発掘調査報告』

(3)打出遺跡の弥生～古墳時代鉄器

小黒智久

弥生～古墳時代の鉄器（鉄片を含む。以下、鉄器）は、弥生後期後半が10点（462～467・473・475・478)、弥生終末期前半が１点（470)、弥生終末期後半が１点（474)、古墳前期前葉が１点（468)、弥生後期後半～終末期前半が２点（476・477)、弥生後期後半～終末期が１点（469)、弥生終末期前半～古墳前期前葉が６点（457～461・471)、弥生終末期後半～古墳前期前葉が１点（472）である。456・479も弥生～古墳時代の可能性がある。以下、本遺跡の鉄器をとりまく様相をまとめたい。

①鍛冶炉の存否

発掘調査の際、本遺跡で鉄製品が製作または加工された可能性は想定していなかった。ただ、北陸の弥生集落では玉作が行われることが多く、当該期の住居と判明した時点で玉作工房の可能性を想定し、覆土を採取して現地で２mmメッシュの篩により水洗した（SI01・04・05)。水洗土壌は土層観察用の十字ベルト（主に床面付近）である。住居の容積に比べればごくわずかな水洗量だが、実施したなかでは玉作を行っていた形跡が明確でない。同時に鍛造剥片や鉄滓も確認されていない。弥生時代の鍛冶遺構とされるものは基本的に住居内で認められるので、一部で鍛造剥片や鉄滓の追求も実施したことになる。

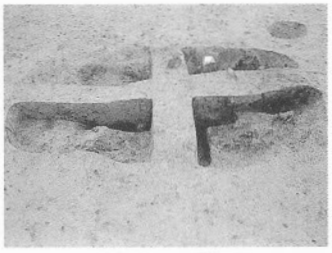
竪穴住居内に明確な鍛冶炉はない。通常の炉でも被熱痕は認められず、やや窪んだ底面に燃料材（炭化材・炭化物）が存在するのみである。被熱痕が確認されない理由が、地山の保水状況や炉の利用頻度にあるのかを自然科学的に追究できていないが、鍛冶炉の存否を考える際にはこの点も考慮する必要がある。

鍛冶炉と断定できないが、可能性のある遺構は存在する。一つはSI01-P02である。P02は中央ピット（P03）を切って構築された長軸52cm、短軸38cm、深さ22cmの二段掘りピットである。覆土は全て炭化物で、ごくわずかに黄褐色土ブロックが混ざる。ピット上部に火災に伴う焼土（屋根土）はほとんど存在しない。ピット壁面に被熱痕は認められないが、可能性の一つとして村上分類（村上2000：64）Ⅱ類（掘りかたのみで、その内壁がわずかに焼けているタイプ。わずかなカーボン・ベッドをもつ）またはⅢ類（ほとんど掘りかたをもたず、床面をそのまま炉として使用するか、若干の粘土を敷いて操業するタイプ。燃料と区別しがたいがわずかながらカーボン・ベッドをもつものと思われる）のカーボン・ベッドに相当するとも理解できないだろうか。ピットの深さや炭化物の量からはⅡ類に相当すると考えるが、内壁に被熱痕がない点が村上恭通氏の概念規定と異なる。ただ、この点は地山の状況と関係する可能性もある。SI01出土鉄器（５点）はすべて火災後の堆積層から出土したが、SI01-P06から砥石が出土していることにも注意したい。

もう一つは、６点の鉄器が出土したSI05の床面で確認されたSK126・127である。３遺構出土土器は同時期のものであり、両土坑がSI05に付属する可能性も否定できない。両土坑とも長軸約1.6m、深さ約0.3mで、SK126は底面に粘土を貼り付け、炭化物や焼土を含む層が形成されていた。断定はできないものの、可能性の一つとして村上分類Ⅲ類に相当するとも理解できないだろうか。

SI01-P02
検出状態

SI01-P02　断面



SK126　断面

SK127　断面

②鉄器の特徴

製品のほかに、不明鉄片（主に棒状）のほか、鉄器製作時の切片（端切れ）がある。切片と考えられる468やその可能性もある456・476・477をどう解釈するかが問題になる。本遺跡で生成されたと考える以外にも、鉄そのものが珍しい当地にあって本遺跡の集団が欲したと考えることも不可能ではないだろう。

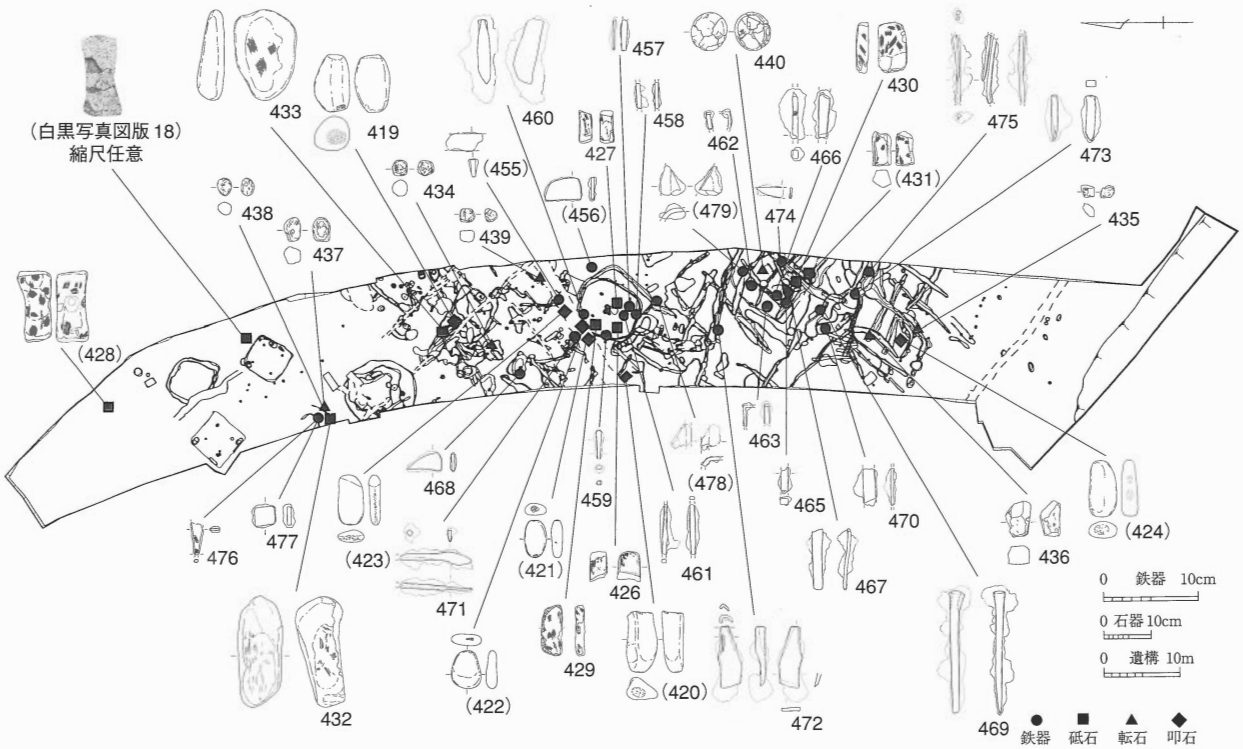
棒状の不明鉄片の位置づけも問題となる。京都府弥栄町奈具岡遺跡で水晶玉生産に棒状鉄器が用いられていたことが明らかになってから、北陸の玉作遺跡出土棒状鉄器も玉作工具とされることが多い（福井市林・藤島遺跡，石川県七尾市奥原峠遺跡，金沢市塚崎遺跡，新潟県上越市下馬場遺跡）。本遺跡例はそれらと類似し、459・475などはその可能性も否定できないが、現状では玉作の痕跡がない。板状の不明鉄片（464・467・477）の存在もあわせ、不明鉄片は製品の折損品という解釈以外にも、加工（研磨あるいは鍛打）直前の素材の可能性も想定できるのではないだろうか。川越哲志氏は板状鉄片・棒状小鉄片も鉄素材の一つと想定する（川越1993：296-302）。本遺跡例は、川越氏が例示したものよりも小型で薄いものの、素材が規格化される必然性はなく、小型品製作用の素材とも解釈できる。林　大智・佐々木勝両氏は、奥原峠遺跡棒状鉄器を「打ち延ばし技法」用の鉄鏃素材と解釈している（林・佐々木2001：180）。

③石器の特徴

砥石は仕上砥が多いが、粗砥（428）も存在する。中央に窪みがあり、小型素材を鍛打する際に鉄砧石として用いられた可能性も想定できる。窪んだ面も磨耗しており、研ぎ面として再利用されたことがわかる。大形の転石（432・433）も砥石として利用されていたが、不定形であることからこれらも鉄砧石の可能性を想定できるのではなかろうか。砥石は地山中のほか、SI01・05，SI01-P06（掘り方内埋土），SD340・363から出土し、鉄器出土遺構との共伴率が高い。なお、SI01-P06例には火を受けた痕跡がある。

叩き石は半分が中世遺構（SD04）から出土した。これらは弥生～古墳時代遺物の可能性がある。他は、地山中（弥生後期後半）２点、SD363（弥生後期後半）が１点である。復元実験の結果、石製鍛冶具で鉄器を製作可能なことが判明している（村上1998：91-94）。本遺跡例でも鍛打は十分可能であり、石槌の可能性も十分ある。鍛冶遺構から出土する石槌の叩き面には鉄錆が嵌入している場合がある。419・420も叩き面に茶色の物質が付着しており、鉄錆の可能性もある。

軽石製研磨具は、鉄器や砥石が出土したSD340（弥生後期後半～終末期前半）のほか、SK117・126（弥生後期後半）、SD114・285（弥生後期後半）・311（弥生終末期前半）から出土した。SD114が上部遺構（波板状凹凸）であるほかはすべて下部遺構である。刃部などの尖ったものを研磨した痕跡が明瞭なものもあり、鉄器の研磨具である可能性が高い。



鉄器・石器の分布（カッコは遺物包含層または地山中または上層遺構出土品）

④北陸の関連遺跡との比較

本遺跡の鉄器をとりまく様相は、鉄器の形態的特徴だけでなく砥石との共伴率が高いことや軽石製研磨具・叩き石の存在など、北陸の主な鉄器出土遺跡と類似する。奥原峠遺跡の鍛冶炉は、村上分類Ⅱ類が1基（SB07）、Ⅳ類（掘りかたがなく、床面をそのまま炉底として使用し、その操業温度は低いため、焼け方がかなり弱いタイプ）が複数（SB01）あると評価されている（村上2000：161）。この他、石川県小松市一針B遺跡SI01（弥生後期前半）では鉄滓の存在から鉄器生産の可能性が想定され、同市額見町西遺跡（弥生終末期）では破損工具の再加工程度の作業が想定されるなど、関連遺跡の様相は弥生後～終末期の北陸に鍛冶技術が定着しつつあることを示唆している。

鉄器　林氏は、石川県加賀市猫橋遺跡から出土した基部に折り返しをもつ鏨を遠隔地からの搬入品と解釈している。明言していないものの、類例として図示されたのは鳥取市青谷上寺地遺跡出土品であり、山陰からの搬入が想定されている（林2005：67-68）。本遺跡出土鏨（469）もそれらと類似した構造をもち、ほぼ同大であることから、本遺跡例は加賀もしくは山陰から搬入された可能性も想定できる。また、不明鉄片の形状や大きさは林・藤島遺跡，奥原峠遺跡，塚崎遺跡出土品と類似する。

軽石製研磨具　奥原峠遺跡・裏山遺跡・下馬場遺跡などからは、打出遺跡例と同様の軽石製研磨具が出土している。特に、裏山遺跡・下馬場遺跡例には、本遺跡例と同様に鉄器（刃部）の研磨痕が明瞭に残っている。

⑤打出遺跡における鉄器生産（鍛冶）の可能性

北陸の鍛冶関連遺構・遺物の様相を考慮しつつ、本遺跡の鉄器および関連遺物を総合すると、切片や棒状鉄片の存在を主たる根拠（鍛冶炉の可能性も想定できるピットも含め）に、村上氏（村上1998・2000）や松井和幸氏（松井1999・2001）が想定する始原的な鍛冶（棒状鉄器を叩き延ばし、鏨で切断して製品に加工する）工程が、弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉の本遺跡で行われていた可能性を想定できるのではなかろうか。村上分類Ⅳ類の広島県庄原市和田原D地点遺跡（弥生時代中期後半）ではかなり厳密な土壌水洗を行っても鍛造剥片や鍛冶滓が検出されないことから、始原的な鍛冶では鍛造剥片や鍛冶滓がほとんど生成されず、住居の炉でも鍛冶が可能と推定されている（松井1999・2001）ことは参考になる。

鉄製品の流通だけでなく、鍛冶技術の伝播も想定可能であることは、本遺跡の集団と他集団（近隣だけでなく、他地域を含む）との関係（交易など）を考えるうえで興味深い。

引用・参考文献（下記以外はⅠ～Ⅲの引用・参考文献（88・89ページ）と同じ）

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター　2002　『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』
大阪府立弥生文化博物館　2005　『北陸の玉と鉄　弥生王権の光と影』平成17年度秋季特別展
（財）石川県埋蔵文化財センター　2000　『小松市額見町西遺跡』
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997　「奈具岡遺跡（第7・8次）」『京都府遺跡調査概報』第76冊　pp.30-82
川越哲志　1993　『弥生時代の鉄器文化』　雄山閣出版
鉄器文化研究会　1997　『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究集会発表要旨集
七尾市教育委員会　1998　『奥原峠遺跡』
新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2000　『裏山遺跡』
新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2005　『下馬場遺跡・細田遺跡』
林　大智　2005　「日本海沿岸域の「鉄」が北陸にもたらした変革」『北陸の玉と鉄　弥生王権の光と影』平成17年度秋季特別展　pp.66-73　大阪府立弥生文化博物館
林　大智・佐々木勝　2001　「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」『石川県考古資料調査・集成事業報告書　補遺編』　pp.165-185　石川考古学研究会
松井和幸　1999　「まとめ 4 竪穴住居跡出土鉄器について」『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』pp.260・261　（財）広島県埋蔵文化財調査センター
松井和幸　2001　『日本古代の鉄文化』　雄山閣出版
村上恭通　1998　『倭人と鉄の考古学』日本史のなかの考古学　青木書店
村上恭通　2000　「鉄と社会変革をめぐる諸問題」『古墳時代像を見なおす　成立過程と社会変革』pp.49-74　青木書店
村上恭通ほか　2000　『考古学ジャーナル　特集　日本海沿岸地域の弥生鉄器』No.467　ニュー・サイエンス社
村上恭通ほか　2001　『古代文化　特輯　弥生社会の多角的解明―日本海沿岸地域の祭祀・墓制と生産・流通―』第53巻第4号（通巻第507号）（財）古代学協会

(4)打出遺跡SI01の復元

浅川滋男・藤井利史（鳥取環境大学）

富山市打出遺跡で弥生時代終末期と推定される竪穴住居跡SI01がみつかった。筆者（浅川）が2004年９月17日に打出遺跡を訪れて遺構を観察したところ、炭化材・炭化茅の残存状況はきわめて良好であり、上部構造を復元するにたる十分な情報を有する焼失住居跡であることがわかった。ここに復元考察を試みる。

１．遺構の分析

(1)平面の規模と形状

SI01は４本主柱をもつ隅丸方形の竪穴住居跡である。ただし、その形状を厳密に観察すると、北辺が南辺に比べてわずかに短く、南辺では直線状の部分が2.0m弱みとめられるのに対し、北辺は扇状にまるまっている。規模は長軸8.4m、短軸7.6mを計るが、柱筋で比較すると、南側のP06-P09ライン上での竪穴幅が約7.4m、北側のP10-P11ライン上の竪穴幅が8.3mで、あきらかに北辺側がひろくなっている。柱間寸法をみても、棟通りにほぼ平行する桁行方向ではP09-P10とP06-P11が3.75m等間であるのに対し、梁行方向ではP06-P09が2.98m、P10-P11が3.10mを計り、やはり北側がわずかにひろい。

床面積は壁溝内側で44.9㎡。ほぼ全面に地山土と類似した厚さ５cmの貼床が施されており、壁溝（深さ約15cm）もSK51による攪乱部分をのぞいて全域にめぐる。縄文時代中期末に遡る岩手県一戸町の御所野遺跡の焼失住居跡では、壁溝にさし込まれた壁板が直立もしくは倒れた状態で多数出土しており、同遺跡でおこなった土屋根復元住居の焼却実験でも、壁の堰板は最も残りのよい炭化材であった［浅川編2001］。打出遺跡SI01の場合、壁溝はあるけれども、壁板はまったく残っていない。壁板が炭化しなかったことも想定されるが、植物質の編物を壁材としていた可能性もあるだろう。鳥取県米子市古市宮ノ谷遺跡の焼失住居跡（竪穴住居跡７、弥生後期）では、壁材とされたヘギ板の編物が出土している。

一方、SI01では床面のほぼ中央に楕円形のピットが複数重複してみつかっている。床面中央にある複数のピットのうち、P03が排水用の「中央ピット」、P05が炉の痕跡という。

入口については東辺のほぼ中央外側で、小ピット２基（P13・P14）が下層遺構SI04の床面でみつかっており、これを戸柱の痕跡とみているようだが、竪穴のエッヂに近接しすぎており、深さもP13が４cm、P14が８cmと浅いので、必ずしも戸柱とは言えないだろう。かりにこれが戸柱の痕跡であるとするならば、切妻の伏屋式開口部の内側にあって、その伏屋を支える母屋桁を支える機能をもつ柱であったとみるべきではなかろうか。

平面の形状全体をみる限り、妻側にあって総長が短いにも拘わらず、直線部分の長い南辺に入口があった可能性が高いと思われる。「中央ピット」や炉がわずかに北辺よりに設けられている点も示唆的で、これもまた南辺入口説の傍証たりうる要素である。

(2)柱穴と柱痕跡

４本主柱穴には、いずれも柱痕跡が残っている。それぞれの実測値を以下に示す。

P06　柱穴径（口径）460mm　柱痕径（底径）140mm　深さ470mm
P09　柱穴径（口径）390mm　柱痕径（底径）160mm　深さ510mm
P10　柱穴径（口径）330mm　柱痕径（底径）180mm　深さ450mm
P11　柱穴径（口径）370mm　柱痕径（底径）140mm　深さ450mm

以上からみて、柱径は140～180cmに復元される。

(3)周堤の復元

竪穴の深さは、遺構検出面から0.6mを計る。発掘調査担当者は旧地表面をⅢ層上面プラス10cm程度と想定しているので、旧地表面からみた竪穴の深さは約0.7mに復元できる。竪穴の周囲には土盛りがなされており、いわゆる「周堤」を形作っていたと想定される。高岡市の下老子笹川遺跡の平地住居跡や鳥取県妻木晩田遺跡松尾頭地区の竪穴住居跡からみて、周堤は幅2.5～3.0m程度、高さは0.5m前後に復元できよう。旧地表面との関係からみて、周堤の外側をめぐる周溝は掘られていなかったと推定する。

2．焼け方の分析と建築部材の同定

(1)焼失状況

SI01は、竪穴内部のほぼ全域に炭化材を残す良質の焼失住居跡である。その焼け方は、焼失竪穴住居跡の典型であり、4本主柱の内側に炭化材と焼土が少なく、4本主柱の外側で炭化材と炭化茅を多く残す。これは、1）4本主柱より内側に天窓もしくは越屋根状の煙抜きが存在して外気（酸素）との接点が多かった可能性、2）主柱より内側の屋根全域を土が被覆していたわけではなく、部分的に下地としての茅が露出していた可能性を示唆するものである。一方、主柱より外側に炭化材・炭化茅が多いのは、そこが土屋根に覆われて湿っており、しかも酸素供給が十分ではないため、不完全燃焼を強いられた可能性を示すものである。周堤部分にも建築材は存在したはずだから、ここに炭化材が残っていても不思議ではなく、実際、2005年に発掘調査された鳥取県琴浦町箆津の乳母ヶ谷第2遺跡の焼失住居跡（弥生後期）では炭化材と炭化茅を残していた。しかし、これは例外的に火のまわりが著しく激しかった例である。一般的には、打出遺跡SI01のように、周堤上では部材は炭化せず、その結果、木材が腐食して痕跡をとどめない。

一方、屋根土の痕跡とみられるSI01の焼土については、主柱の外側に集中して10～20cmほど堆積しているが、北西隅の周辺のみほとんどみとめられない。これについては、以下のどちらかと考える。

a）北西隅の屋根に土を被せていなかった。

b）北西隅に火熱がそれほど及ばなかった。

北西隅では、他の部分よりいくぶん少ないとはいえ、炭化材が残っているので、土に覆われていた可能性が高いから、ここではとりあえずb）と解釈しておくが、近年、大阪府八尾南遺跡（弥生後期）の竪穴住居跡で隅部分に刻梯子が発見されたように、隅に出入口を設ける場合もあるようで、a）はその可能性を示唆するものとして留意したい。

(2)垂木とサス

炭化材のなかで大多数を占めるのが垂木である。竪穴のエッヂが直線状の部分では平行配列、北辺などの湾曲エッジ部分では扇形配列とする。これら垂木の大半は板材か丸太半截材であり、角材や丸太材の残存例は少ない。一般的に隅の部分では板垂木が使いにくいので、小径丸太を扇垂木として処理するが、SI01では炭化材が少なく、南東隅に小径木を残す程度である。板垂木は、厚さ0.5～8cm、幅6～25cmである。丸太半截材の垂木は厚さ1～6cm、幅5～19cmを計る。垂木のピッチ（隣あう材の中心間距離）は大半24cm以内におさまり、とりわけ4～12cmが最も多く、きわめて密な配列をなす。ただし、扇垂木となる北辺では幅広のピッチもみとめられる。

注目したいのは垂木材が上下にかさなる部分があることで、上下のうちの下材はサスの可能性がある。とくに四隅付近で出土し、若干斜め方向をむく材は、厚さ5cm、幅12cm前後と角材に近く、丸太材を用いる場合もある。これらをサスと断定するのは危険だが、「サスの可能性がある材」と認定しておきたい。

なお、戸柱の痕跡とされるP13・P14のほぼ中間に横たわる垂木状の板材は、かりにこの位置に伏屋状の切妻屋根（入口）が存在したと仮定すれば、その伏屋の棟木であった可能性もある。ただし、それは厚さ2cmの板材であり、形状からみれば、棟木として扱いにくい。

炭化茅は南東隅のほか中央から北西辺付近に多く分布し、床面だけでなく、炭化材の直上で膜状に検出された。ここにいう炭化材とは大半が垂木であり、遺存状態が良好であった南東隅では肉視でも植物質とわかる茅が出土した。垂木上にまず横方向に茅を置き、その上に縦方向に茅を葺きながす。妻木晩田遺跡や黒井峯遺跡で確認されている土屋根下地としての横縦二重葺き構造が、打出遺跡でも確認できたのである。とくに注目されるのは、半裁材との関係である。松江市田和山遺跡の焼失住居跡（弥生中期）では、やはり半裁材を垂木に使っており、その平坦面の上に茅を横方向においた事実があきらかになっている［鳥取県教育委員会2004］。ところが、打出遺跡SI01では、半裁材の湾曲面に横方向の茅を敷いている。山陰と北陸で、垂木の上下面を反転させていることが判明した。

(3)梁と桁

SI01では、桁材および梁材とおぼしき横材が床面に落下して残っている。これは非常に珍しいこと

である。P06-P09上に残る半裁丸太材が梁、P09-P10上の半裁丸太材が桁と思われる。いずれもほぼ当初位置で真下に落下している。ところで、P09の上面では、梁が下、桁が上になった状態で両材が交差しているようにみえるが、梁と推定される材がマツであるのに対して、P９上の「梁状の材」はコナラであり、これらは同一の材ではない。調査所見によれば、P９上の「梁状の材は垂木が桁下にもぐりこんだものと解釈される。したがって、折置組（梁が下で桁が上）か京呂組（桁が下で梁が上）かを判別できないが、ここでは左右の桁行柱間寸法が等間であることを考慮して、折置組を採用する。

なお、P06-P11、P10-P11の近辺には横架材らしき材はみられないが、東辺に近い位置でP06-P11に平行する半裁材の破片がみられる。この材は桁が落下時に位置を移したものか、母屋桁の可能性があろう。

３．上部構造の復元

以上から打出遺跡SI01の上部構造を復元してみよう。

⑴土屋根の構造

屋根とかかわる諸要素を整理すると、以下の３つの要素の複合性を看取できる。

ｉ　床面直上の炭化材（建築部材）
ii　炭化材を覆う屋根下地層（炭化茅）
iii　炭化材と下地層を覆う焼土層

この３つの条件を充足する焼失竪穴住居跡は、屋根を土で覆われていたとみてまず間違いない［浅川2001、2004］。ただし、土をどの程度覆っていたのかについては注意を要する。SI01の焼け方を再度検討すると、４本主柱から内側に炭化材・炭化茅・焼土がほとんど残存しないわけだから、この部分は完全燃焼をおこしたことになり、茅が露出していた部分が少なくなかったものと想像される。それは屋頂部の越屋根（煙出）だけではなく、土屋根の下地である茅葺き面が少なからず外気に露出していた可能性を示すものである。焼土の分布範囲からみて、屋根土は越屋根まで達しておらず、越屋根と４本主柱の中間あたりでとまっていたのではないか。参考までに述べておくと、これまで多くの縄文・弥生住居を復元建設するなかで、土を屋根全面に被せる場合、屋根の重量が増して湿度が高くなり、垂木の腐敗や破損を招く。土を部分的に被せると、重量も湿気も少なくなるので、建物が長持ちしやすい。

屋根の構造は、隅以外の部分を板材および半裁材を垂木として密に配列し、その上にまず茅を横方向、ついで縦方向に葺いてから、土を被せたものと思われる。横方向の茅は土の落下防止、縦方向の茅は雨雪の排水を目的とする。縦方向の茅は穂を下に向ける逆葺とするが、周堤との接地面のみ本葺とする。隅に関しては、おもに小径丸太を扇垂木状にめぐらしてから、茅を横→縦に葺き土を被せたのであろう。屋根勾配は8／10前後とする。くりかえすけれども、土は屋頂部までではなく、越屋根のやや下から周堤まで被せる。屋根土の厚さは上端で０cm、下端（周堤近辺）で約30cmとする。

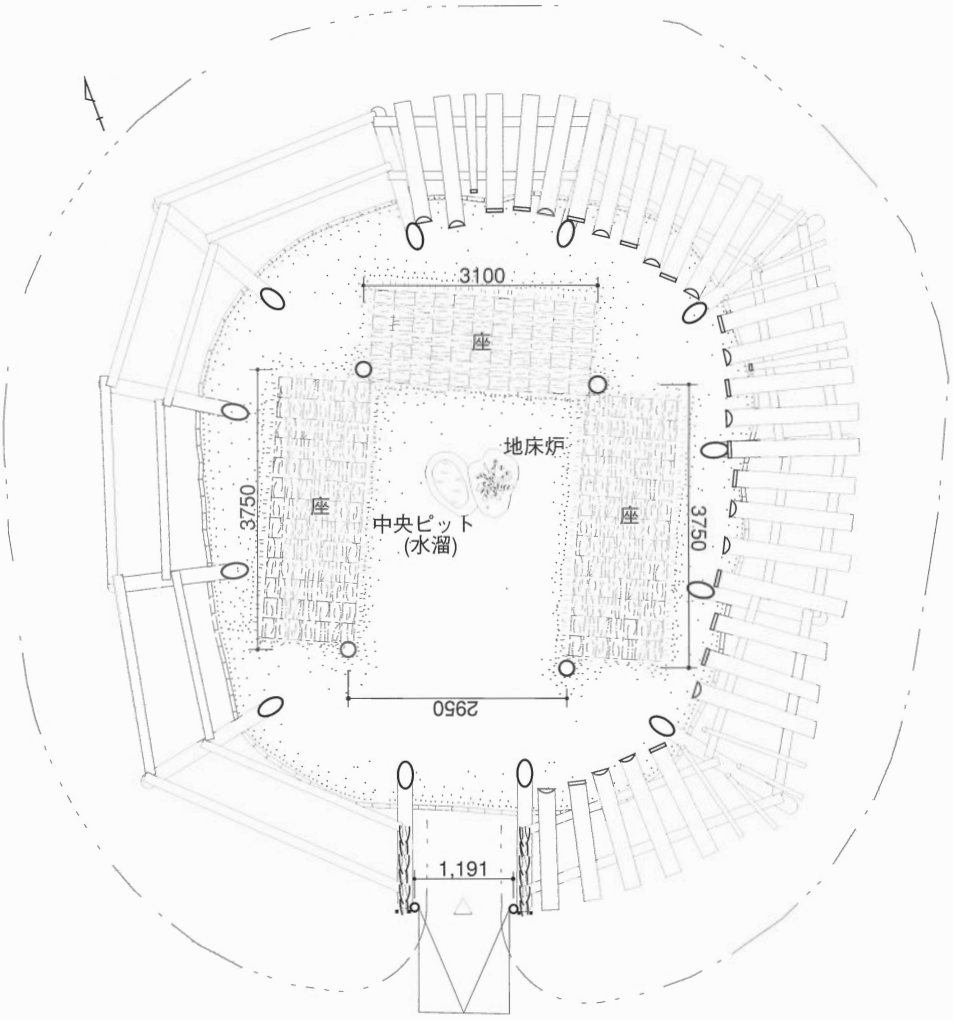
越屋根（煙出）の形状や構造は不明だが、土器絵画や家屋文鏡にみえる船形屋根とする。越屋根はサスを最上段の母屋桁にさして勾配をきつくする（12.4／10）。越屋根については、茅の縦葺のみ。土を被せることはありえないので、横方向の茅は必要ない。また純粋な茅葺きであるから、越屋根の垂木は丸太でピッチを30cm程度あける。

⑵入口の問題

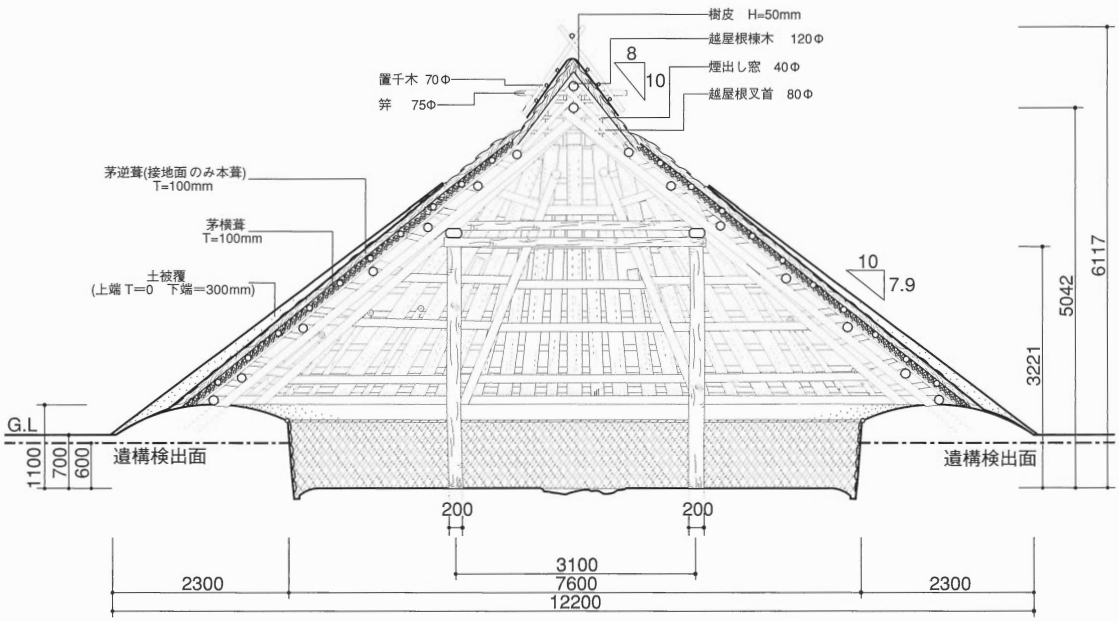
入口の位置は判然としない。発掘調査の見解に従えば、東面中央の平入となるが、戸柱が竪穴の壁に近すぎるところなどに難点がある。竪穴住居全体の形状等からみると、南辺中央の妻入が妥当と思われる。さらに、隅から出入した可能性もある。今回は平入案と妻入案を両方示すことにした。入口は、平入の場合、周堤土にサスを差し込んだ伏屋型の切妻造、妻入の場合、周堤土に戸柱を立てた片流れの差し掛け庇とした。

⑶軸組とサス

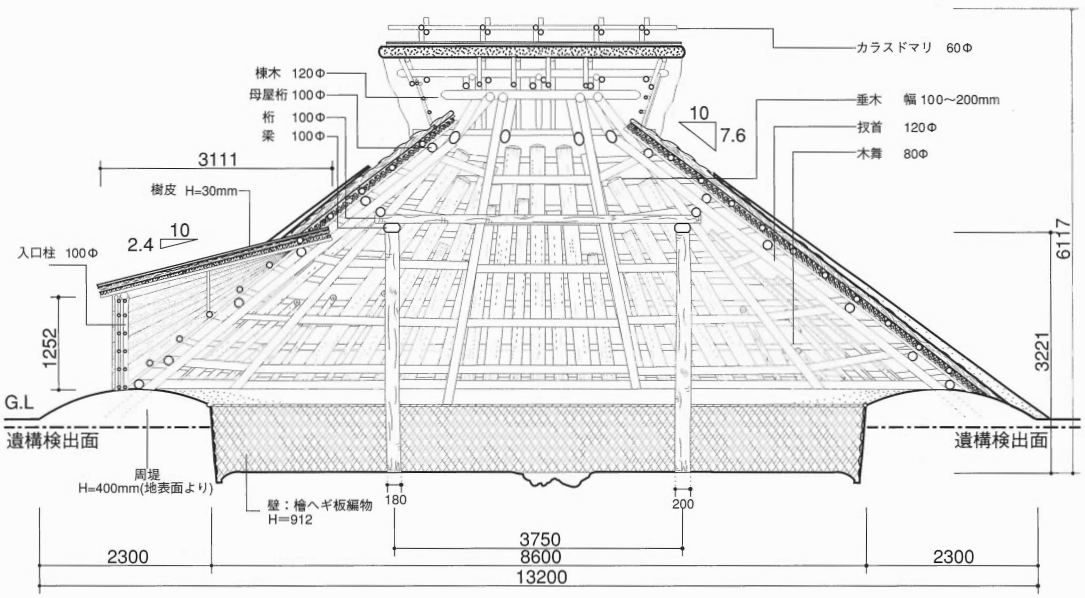
平面は入口と反対側にあたり、「中央ピット」と炉を囲む３方向に座を設ける。座は枯枝・枯草を下地にしてムシロを敷く。軸組は４本主柱に梁・桁を折置組で架ける。屋根荷重はサスを通して軸組



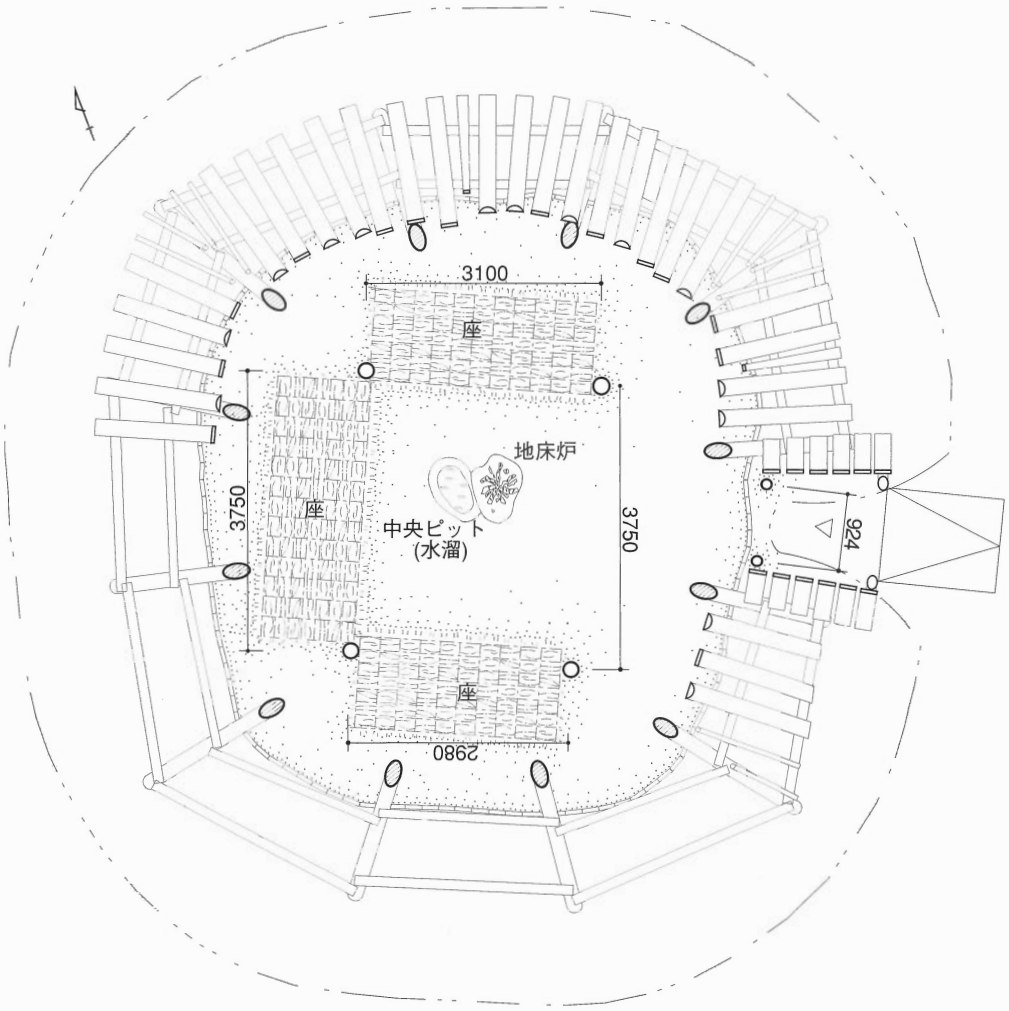
妻入案　復元平面図　1：100



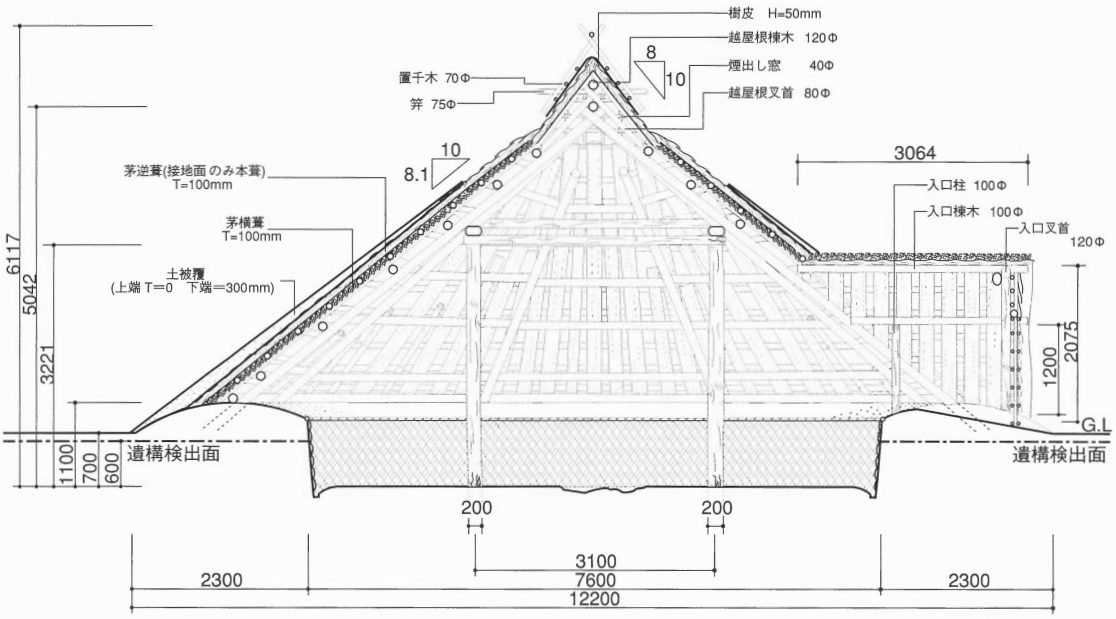
妻入案　復元梁行断面図　1：100



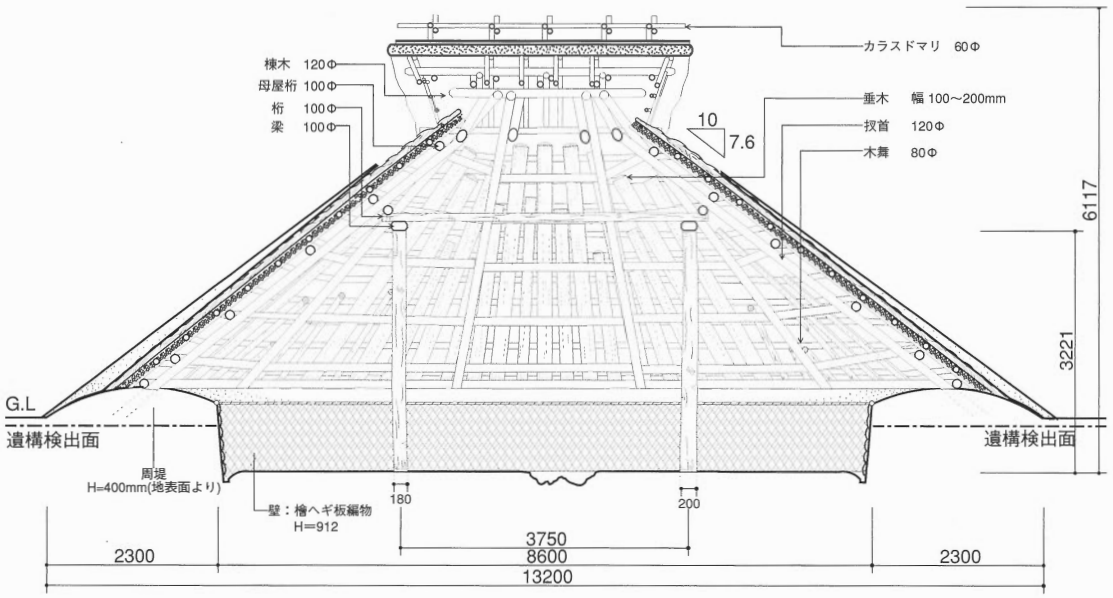
妻入案　復元桁行断面図　1：100



平入案　復元平面図　1：100



平入案　復元梁行断面図　1：100



平入案　復元桁行断面図　1：100

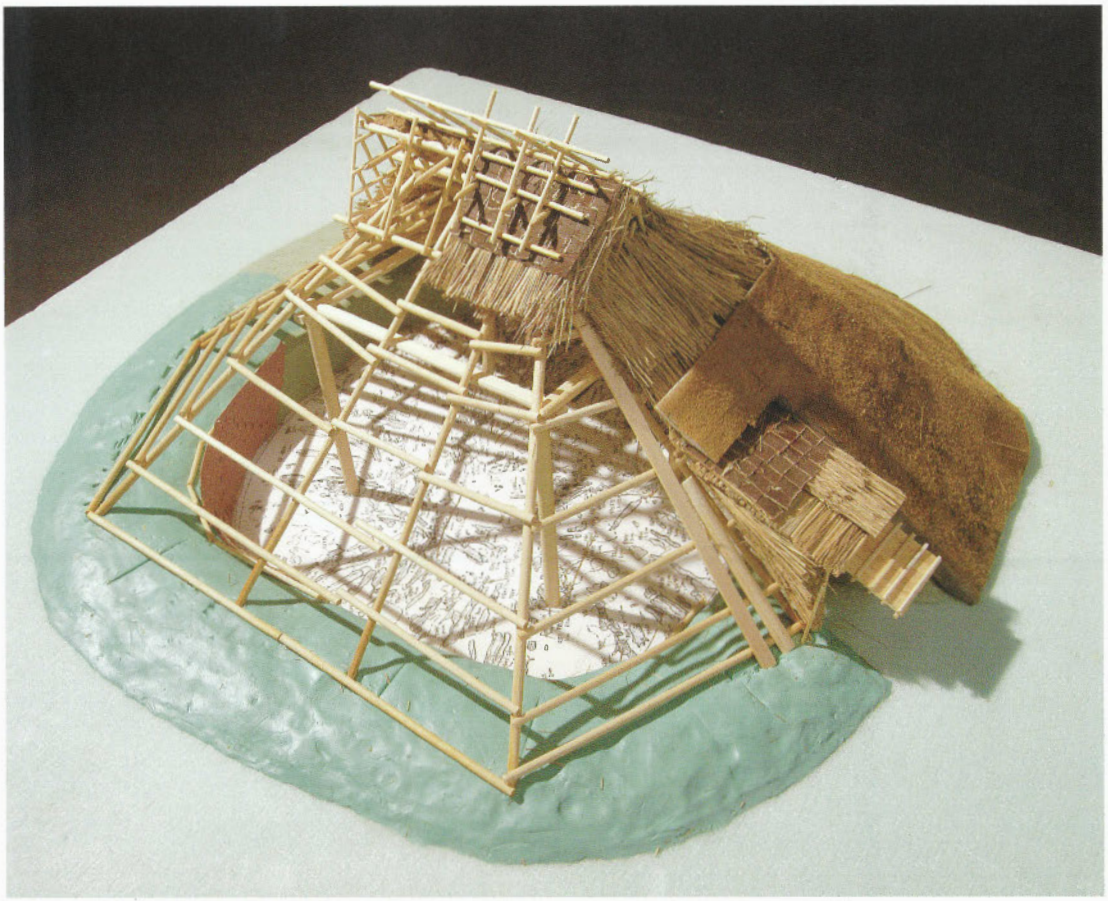
に伝達する。サスは4隅のほか各辺に2本配し、計12本用いる。

周堤は幅約3m、高さ約50cmとする。サスは周堤に突きさすのではなく、あらかじめ地表面上に配列しておき、それに周堤土を被せて固める。垂木は周堤のほぼ中点に下端をあてる。壁溝には編物の壁を立てかけて、竪穴エッジに並べた丸太と結んでとめる。

以上、打出遺跡SI01の上部構造に関する復元考察に取り組んできたが、従来の復元と異なるのは、屋根土の被覆範囲である。SI01の焼失状況をみる限り、屋根被覆土は腰屋根まで達していたわけではなく、桁ー棟木の中間あたりで途切れていた可能性が高いと思われる。主柱より内側に炭化物・焼土が少なく、その外側に集中する傾向は、他の焼失住居跡でも多々みうけられるので、屋根土の被覆範囲が屋根の全面に至らないという状況は、ある程度普遍化していたものとみなせるかもしれない。これまで復元建設に携わってきた経験を含めて述べるならば、小型住居では屋根のほぼ全域、大型の住居では桁・梁のあたりまでを土が覆っていた可能性がある。竪穴の掘削土は周堤に用いられるので、屋根土は他所から運搬してくる必要があり、その土量には限度があったはずであり、また、屋根に被せる土を多くすると、荷重と湿気により屋根下地の破損を招く。要するに、大型住居の全体を覆う土を確保するのは困難であり、かりに全面を土で覆ったとしても、それは住居の崩壊を導くものであった。景観的にみるならば、茅下地を露出する大型住居と露出しない小型住居が混在していたことになるであろう。

参考文献

浅川滋男　2001「土屋根住居とは何か」『宮畑縄文人の家を考えるー焼けた家の謎　』pp.11-16、福島市教育委員会
2004「宮畑遺跡SI-43の復元」『福島市埋蔵文化財報告書』第173集　pp.189-203、福島市教育委員会
浅川滋男（編）　2001『竪穴住居の空間と構造』平成11～12年度科学研究費特定領域研究成果報告書、国際日本文化研究センター
鳥取県教育委員会　2004『弥生のすまいを探る　ー建築技術と生活空間ー』第5回弥生文化シンポジウム予稿集



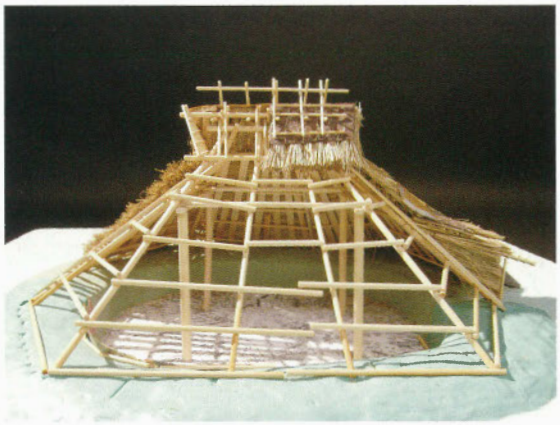
復元模型妻入案　1／20　南西方向からみた架構

妻入案　東方向からみた土屋根

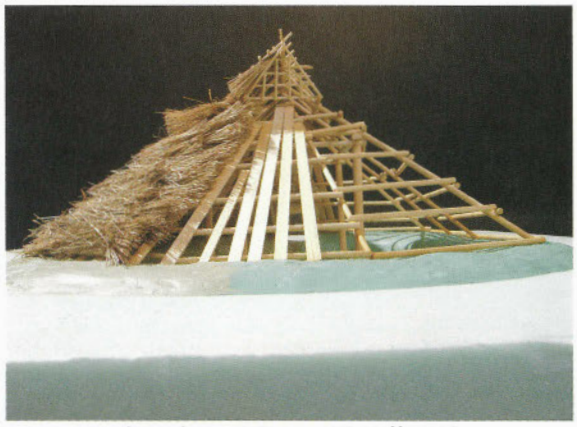
妻入案　真上からみた架構と屋根

妻入案　南方向からみた架構と入口

妻入案　南東方向からみた土屋根

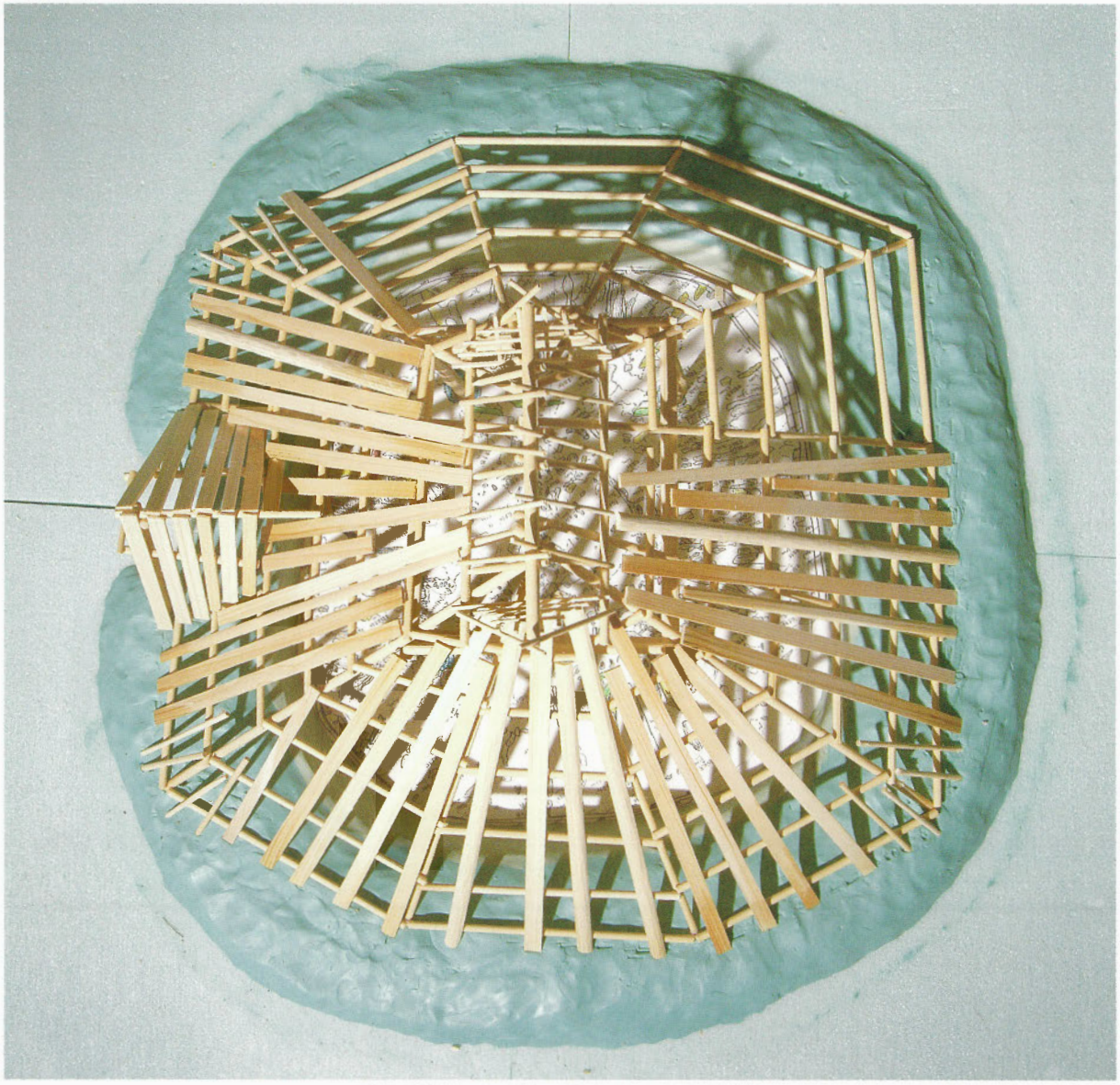


妻入案　西方向からみた架構

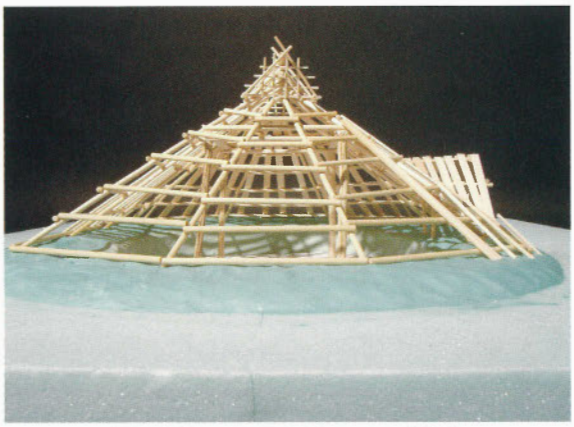


妻入案　垂木と二重の茅下地

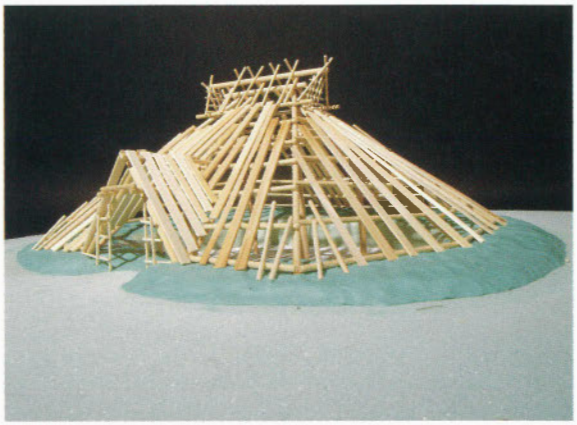
妻入案　越屋根



復元模型平入案　真上からみた架構



平入案　南方向からみた架構



平入案　北東方向からみた架構と入口

平入案　東方向からみた架構と入口

平入案　板垂木と丸太半裁垂木

平入案　内部（出入口側）

同　内部（北辺側）

Ⅵ　総括

過去の発掘調査（富山市教委2004・2005）もふまえて本遺跡の様相をまとめ、総括としたい。

①遺跡の消長

第Ⅰ期（縄文時代晩期）

旧河川から縄文時代晩期の土器が出土した。未調査区に当該期の遺構が存在する可能性もある。

第Ⅱ期（弥生時代後期前半～古墳時代前期後半）

本遺跡の主体を占める時期で、遺物量が最も多い。旧河川脇の微高地上に集落が形成された。旧河川の安定度（水量や土砂供給量）と密接に関係し、河川の安定期に形成された。地山に含まれる土器の存在から、弥生時代後期前半から人々の活動の痕跡がうかがえる。土器型式に表れない時間が経過した時点で旧河川から若干の土砂供給があり、弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉にかけて集落形成がピークとなる。その後、遺構数が減少し、古墳時代前期後半で集落が終焉を迎える。旧河川の対岸に位置する江代割遺跡もほぼ同様の推移を辿り、土器様相の類似性からも両遺跡間の密接な関係がうかがえる。

第Ⅲ期（奈良～平安時代）

直線道路（官道）の敷設を契機に、道路周辺が整地された。道路周辺では畠作が行われていた。

第Ⅳ期（室町時代）

微高地西側のやや低くなった地区を中心に集落が形成された。排水も兼ねた区画溝で集落内を区画し、その内部に居住域が形成された。微高地上は集落の縁辺部に相当し、墓が営まれていた。旧河川が埋没して形成された潟あるいは河跡湖では、漁労が行われていた。

第Ⅴ期（江戸時代）

遺構数は減少するものの、集落は存続している。鋼精錬が行われていた。

②平安時代の官道（SF01）

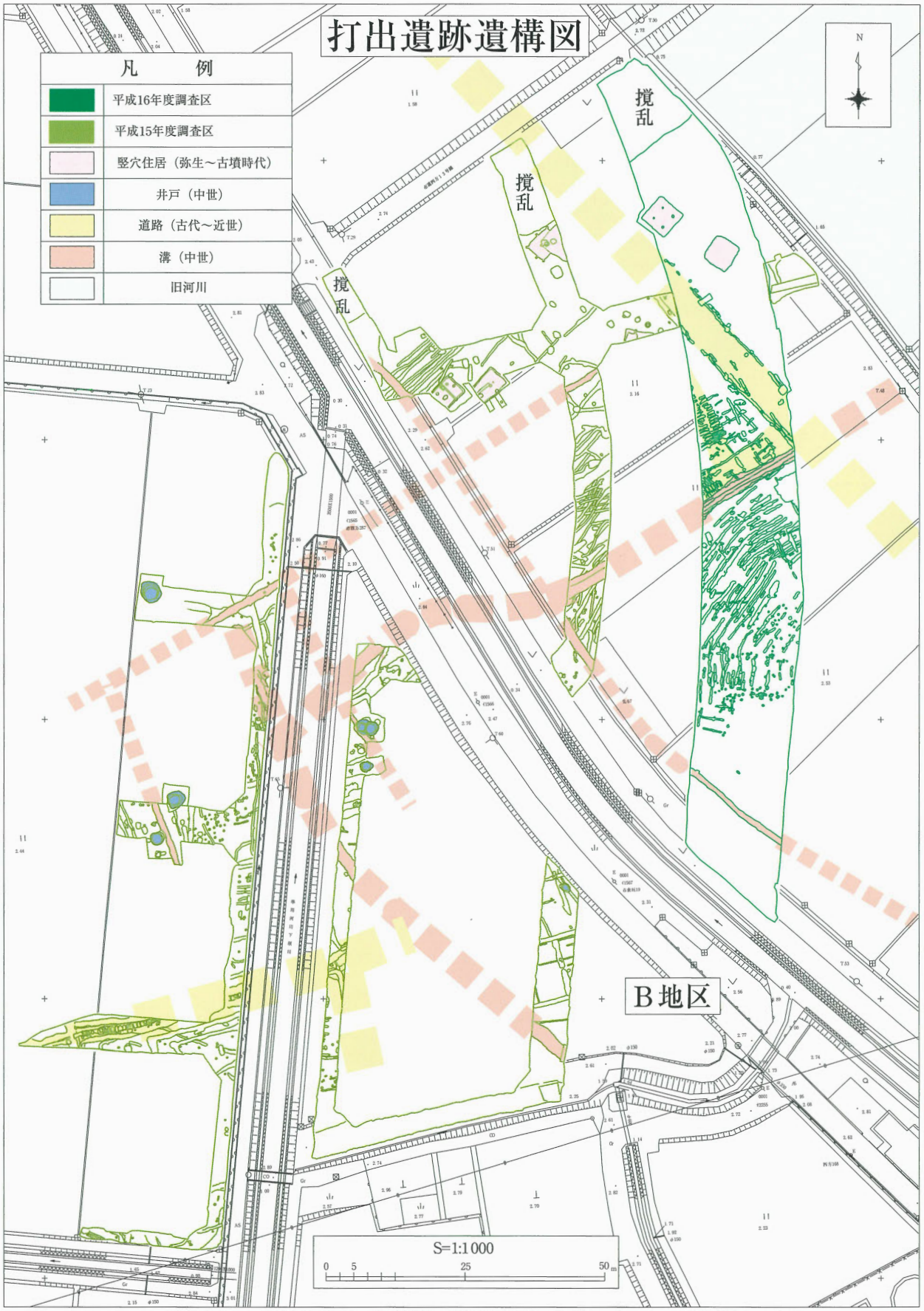
遺存状態は悪いが、平安時代の官道が微高地上を旧河川に沿って敷設されていたことが明らかになった（Ⅴ(1)参照）。富山湾の海岸線は奈良～平安時代には現在より１～２km沖合いにあったと推定され、文献記録などから近世の浜街道に相当する「海岸ルート」の存在を推定できる。南東側の延長方向には米田大覚遺跡（新川郡衙）があり、北西方向は海に通ずる。白城駅推定地周辺の地名から、平安時代は放生津潟を内陸側に迂回する北陸道（「内陸ルート」）が存在した可能性が高いが、駅間距離の検討から、それ以前には海岸ルートの駅路であった可能性も指摘できる。SF01は海岸ルートと駅路（内陸ルート）との連絡道であると同時に、駅路（その先に越中国府がある）と新川郡衙を結ぶ官道であったと考えられる。中世岩瀬湊に比定される西岩瀬・四方地区の海岸は良港の条件を備えており、奈良～平安時代においてもこの一帯は水上・陸上交通の要であったといえる。

SF01は、越中国の官衙や駅、官道の研究に新たな問題意識を提起することとなった。

③弥生時代の焼失住居（SI01）

住居構造　炭化材の遺存状態が全国的にも良好な焼失住居が確認されたことで、北陸の弥生時代竪穴住居の上屋構造を復元する際の基準資料が得られた。垂木上に横→縦と二重に茅を葺いた後に土を被せた土屋根住居であることが確認された。復元される住居構造は全体的に山陰と類似しており、土器様相だけでなく住居構造でも山陰との関連性が確認された。そのようななか、SI01の母屋桁への半截丸太材（垂木）の架構方法が山陰とは異なることが判明した（Ⅴ(4)参照）。SI01の中央ピットは壁溝よりも浅く、この点でも山陰とは異なり、全体としての類似性のなかに地域性も認められることが明らかになった。

SI01では、住居の南東辺中央に小ピットが２基確認され、重複するSI04にも同じ位置に同様のピットが確認されたことから、出入口に関係する（戸柱の）可能性も提示した。建築学の視点でSI01の上屋構造を復元すると、確認された小ピットを戸柱と理解するのは難しいとされた（Ⅴ(4)参照）。小ピットからは遺物が出土しており、遺構であることは間違いない。住居との同時性を証明することは難しいが、その位置を積極的に評価し、通常は確認されることがない戸柱の可能性もあえて想定した。浅川滋男・藤井利史両氏には発掘所見に基づく復元案も作成いただき、小ピットを活かした構造も可能であることが判明したが、その場合でも戸柱の柱穴とは考えにくいとのことである。資料の蓄積に



16年度調査区は上部遺構（下部遺構（竪穴住居）２棟を含む）の遺構図である

よる小ピットの検証を待ちたい。

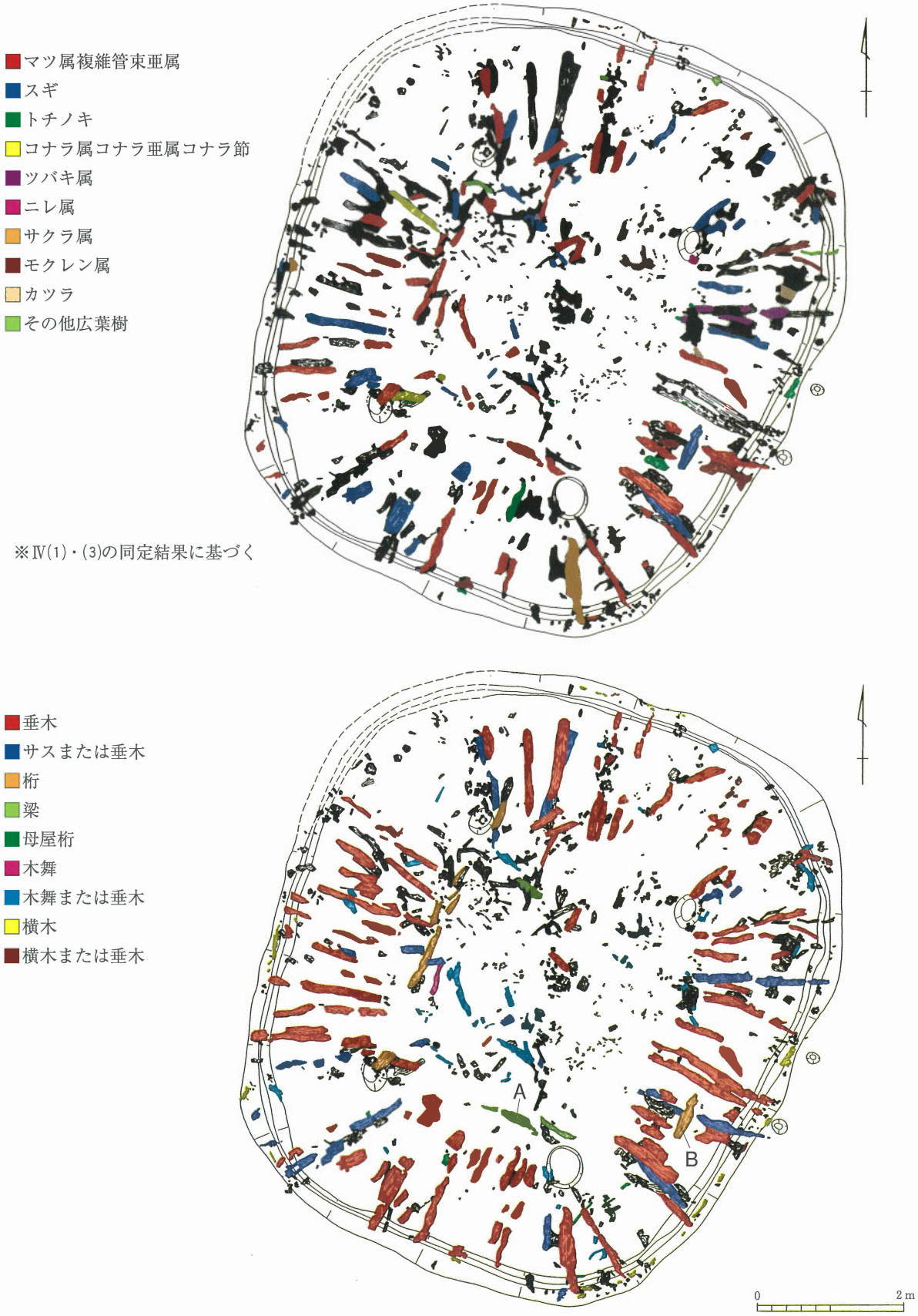
火災の要因とメカニズム　土屋根住居が焼失している以上、各地で行われている復元住居の焼却実

SI01　平行投影（オルソ）写真図

テクスチャマッピング（三次元解析データへの写真画像貼付け）による三次元鳥瞰図

三次元座標の計算により作成された三角網（TIN）と三次元鳥瞰図の合成図

掲載画像は、SI01 周辺の基準点座標（４点）とその標高値を用い、２枚の空中写真（俯瞰撮影）画像上に写っている共通点（対応点：約２万２千点）の三次元座標解析作業により作成。住居出入口を右側中央に位置づけ縮尺１／100 で図示。
ソフトウェア：三次元写真計測システム　Kuraves－G2（倉敷紡績 株式会社）　　作成者：株式会社 日本テクニカルセンター



SI01出土炭化材の樹種同定結果（上）と種別復元案（下）

験（浅川ほか2001・石守1995）結果から、SI01が何らかの理由により意図的に焼却（放火）されたことは間違いない。その理由に考古学のみからアプローチすることは困難なためここでは追究しないが、火災のメカニズムの観点から、その状況に迫ってみたい。

火災による燃焼は、燃焼するものとそのおかれている環境や条件によって左右されるが、終局的には燃焼の時間、温度、エネルギー、量などが関連して決まる。燃焼する可燃性固体は、熱を受けてそれぞれ特有の状態で変化し、その変化の過程で消火の時期や焼け方の強弱に影響を与える。木材が加熱されると、含有水分が蒸発を始めて100℃で激しくなり、すべて水分を気化してから揮発性のエステルが出始め、160℃位から分解ガスが出て褐色になる。この程度の温度でも、燃え易い状態の古い木材は口火があれば着火する。260℃で分解は急激になって多量の分解ガスを発生させ、口火があれば完全に着火する。300～350℃で炭化が終了し、420～470℃で木材自ら発火して燃えだす。過去の実験事例では、風速にも左右されるが、現代の木造建物の燃焼は４～14分で最盛期を迎え、６～19分で最盛期から焼け落ち、出火から焼け落ちるまで13～24分かかるといわれる。この時の最高温度は1,000℃を超えることが判明している。

開口部付近では、燃焼空気の供給量が多いために燃え方が強くなりやすい。また、形が薄いほど、細いほど、小さいほど、また表面が粗雑なほど着火し易く燃え易い。可燃性固体の質及び形が同じであっても、それらの状態が着火や燃焼の難易を大きく左右する。一枚の紙も、水平状態にあるよりも垂直状態にある方が、同じ垂直状態でも他の個体に密着しているよりも全く遊離している方が、さらに適度に隔たっている方が、より燃え易い。一本の箸でも水平より垂直の方が、一本よりも適度の間隔を保って数多い方が、より燃え易い。上下左右いずれの位置にある抵抗体に対しても、火流は抵抗を避けながらより高い方へ延びようとする。また、燃えの結果として焼けが残るのであるが、その燃えの見方の基本はあくまで焼けの比較にある。比較することによって、焼けの強弱とその方向及び受熱の方向とその過程を見究め、延焼拡大する火流を探求して帰納的に出火箇所を判定するのである。ただ、燃え以外の要素によって焼けが強く見えるケースも多く、焼けの見方を誤り易いので、その判別には十分注意しなければならない。

一般的には壁などに特徴的な面を見ることができる。初期の早い段階では、消火や自然鎮火した場合は逆扇型や菱型となり、中期の段階では扇型や平行型となり上への燃焼や平行して燃える。後期になると、床面から立ち上がった火は天井などに上り、上への延焼に阻害するものがある場合は水平に延焼するが、その後は燃え下がりがある。こうした壁などの立ち上がりの比較や燃えの強弱（燃え細り）などから方向性を見つけ、全体としての方向性を見つけるのである（消防大学校1995,（財）全国消防協会2004）。

SI01の主柱間を結んだ長方形のライン内側では屋根下地材の桁や梁などの大きなものしか残存していないのに対し、外側は屋根下地材の垂木、木舞などが全体的に炭化して残存していることから、内側の焼失が多く、強い燃焼があったことがわかる。屋根中心部にあった煙出し部分の焼失が多いのは、煙出し部分からの燃焼空気の供給量が継続して多かったことで燃焼が促進されたことによる。

住居の出入口について、発掘所見からは南東辺、住居構造の復元からは南（南西）辺が想定された。炭化材に注目すると、４本の主柱間を結ぶ長方形の外側は全体的に炭化し多く残存しているが、南東辺中央部分・南西辺中央部分とその奥に位置する北西隅が床面近くから残存していないことがわかる。出入口は燃焼に必要な空気の供給が可能で、強い燃焼が継続していた可能性がある。出入口での燃焼が先に始まっていた場合は住居内に煙が充満し、北西隅には燃焼に必要な空気の供給が困難となるので、当該部分に炭化材の残存が少ない（焼きが強い）のは燃焼が初期の段階から始まっていたことによると推定される。従ってこの部分が出火箇所となった可能性が高い。この部分を立体的にみると、床面近くから立ち上がった火が壁面から屋根の煙出し部分まで燃え上がり、この部分が煙突的な役割をして燃焼を促進したものと考えられる。その後、屋根の崩落によって住居内の燃焼空気が供給不足となり、不完全燃焼のまま鎮火したものと推定される。

註　本項執筆にあたり、火災に詳しい久保正巳氏から多くのご教示を得た。記して感謝申し上げます。

④第Ⅱ期集落の特徴

発掘調査によって13棟の竪穴住居のほか、平地住居の可能性もある周溝状遺構が３基確認された。

集落の存続期間は弥生時代後期前半～古墳時代前期後半であり、現在までの調査例による限り富山県域における当該期の集落としては、比較的長期間存続する集落といえる。

本遺跡の竪穴住居の規模に注目すると、富山県域のなかでは大型に属するものが弥生時代後期および終末期にそれぞれ１棟ずつ確認された。また、住居の規模が大型化・小型化する時期や平面形・規模が多様化する時期がおおむね富山県域の他遺跡と類似していることが判明した（V(2)参照）。

大型住居が存在するといっても、それは集落内あるいは神通川・常願寺川下流域という小地域のなかでは相対的に大型住居ということであって絶対的なものではない。富山県域には本遺跡例よりもさらに大形の住居も存在し、石川県域と比べればむしろ中型住居に含めるべき規模である。また、同時期に中型・小型の住居も認められることから、集団内が均等ではなかったことをうかがわせる。富山県域においても小地域間で格差は認められるが、住居の規模等の変遷からすると本遺跡の集団は、大局的には富山県域の他集団と同じような社会状況にあったと考えられる。

⑤鉄器の保有状況からみた弥生～古墳時代集落

V(3)で示したように、本遺跡では弥生～古墳時代の鉄片を含む鉄器が富山県域最多となる全26点出土した。弥生時代と確定できるのが12点なのに対し、古墳時代と確定できるのは１点である。時期幅をもって捉える必要があるものが半数あるが、弥生時代鉄器が主体なのはほぼ誤りないだろう。ただ、古墳時代に鉄器が減少したのではなく、それは古墳時代初頭前後に新たな送風技術が朝鮮半島から伝えられ、精錬鍛冶が可能になったことで、鉄素材の生産だけでなく古鉄の再溶解・再利用が可能になった（村上1998：106-111）ことに起因していると考えられる。

目に見える鉄器の保有状況に注目すると、SI05（弥生時代後期後半）・SI01（弥生時代終末期後半）に鉄器が集中することがわかる。SI05が大型住居、SI01も大型に近い中型住居と、各時期のなかでは中心的な住居の一つであったと考えられる。つまり、本遺跡の集団のなかでも比較的高い階層にあったであろう人物の近くで鉄器が保有されているのである。遠隔地からの搬入品と思われる鉄器の存在もあわせ、本遺跡の集団はリーダーを中心に遠隔地（石川県域、あるいは鳥取県域）の他集団とのネットワークを有していた可能性が高い。住居の規模等を考慮すると、富山県域の諸集団のなかで最有力とはいえないが、鉄器の保有状況からすると神通川・常願寺川下流域という小地域のなかでは拠点的な集落であったと評価できる。拠点でありえたのは、二大河川の河口に近く交通の要衝となる地理的要因だけでなく、弥生～古墳時代には旧河川の水量が安定していたという自然環境にもあると考えられる。野島　永氏は山陰～北陸の弥生時代鉄器の流通構造を拠点的交易型と評価した（野島2000）。本地域はその東端に位置づけられ、本遺跡の鉄器のあり方は野島氏の評価を裏付けるものといえよう。

弥生時代後期以降、富山県域でも厚葬の（顕著な墳丘盛土をもつ）首長墓が出現し始める。神通川・常願寺川下流域でも、本遺跡から神通川を越えた南東方向約５kmの豊田地内にちょうちょう塚（藤田・駒見1981）が存在する。一辺約20m、高さ約3.5mの方形プランで、墳丘盛土から埋葬儀礼に使用された焼成後底部穿孔壺などが出土した。本地域では弥生時代後期以降、階層化した集団関係が形成され、拠点的集団により鉄器の交易が行われていた。古墳時代前期前葉における厚葬墓の出現には、このような背景が存在するのである。

おわりに

本報告書では、特にV(1)～(3)において想定しうる可能性を最大限に解釈した。それは、最も遺跡を把握している調査担当者が想定できる可能性を示さないと遺跡の正当な評価につながらないという考えに基づく。解釈の前提となる事実の誤認や立論に恣意的なところがあるかもしれないが、本報告を叩き台に読者の手で批判的検証が加えられることで、本遺跡が地域史に位置づけられることを望みたい。自然科学分析で得られたデータ等の解析や他の考古学的課題の検討は他日に期したい。　（小黒）

引用・参考文献（下記以外はⅠ～Ⅲ・V(3)の引用・参考文献（88・89・190ページ）と同じ）
（財）全国消防協会　2004　『防火管理の知識』
消防大学校　1995　『現場の見方現場調査の進め方』
野島　永　2000　「弥生時代の鉄流通試論」『製鉄史論文集』pp.45-66　たたら研究会
藤田富士夫・駒見和夫　1981　「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』pp.53-73　富山考古学会

巻末カラー図版1（B地区）

SI01　炭化材検出状態（炭化茅除去前）

橙色焼土と炭化材（柱状ブロックは分析試料）

垂木上の茅

同上アップ

垂木上の茅（保存処理後）

同上断面

SI01　炭化材検出状態（炭化茅除去後）

SI01　南東辺炭化材検出状態（北東から）

SI01　南西隅付近炭化材検出状態（南東から）

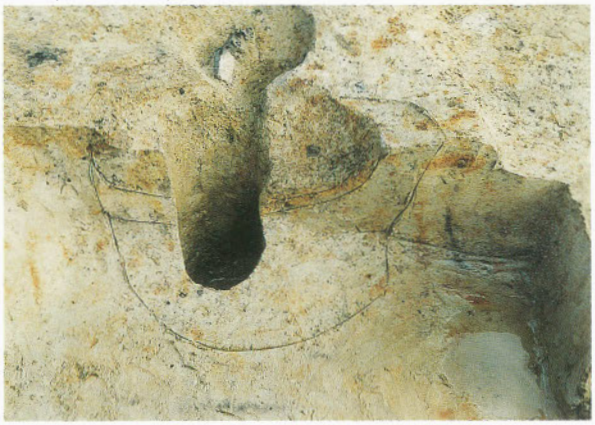
SI01-P09付近の桁と垂木（東から）

南西辺桁断面（P217（下）のA、西から）　南東辺梁断面（P217（下）のB、北から）

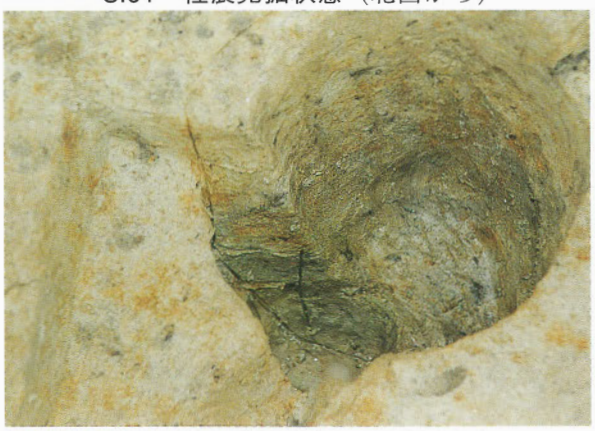
巻末カラー図版3（B地区）

SI01　柱痕検出状態（北西から）

SI01　柱痕完掘状態（北西から）



SI01-P6　断ち割り（北西から）



SI01-P10　断ち割り（北西から）

SI01-P10　完掘状態

巻末カラー図版4（B地区、番号は第47～49・62図と同じ）

SI01　「火災後」相当層出土土器（抜粋）

SI01・02出土玉（ほぼ実大）

441・443実体顕微鏡写真（目盛は1mm）

白黒写真図版1（A地区）

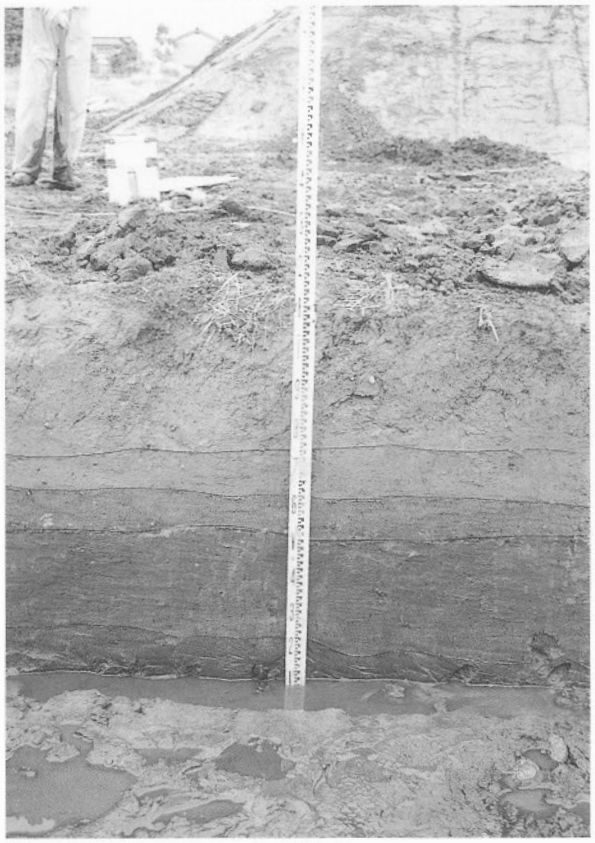
完掘状態（北から）

完掘状態（南から）

白黒写真図版2（A地区）

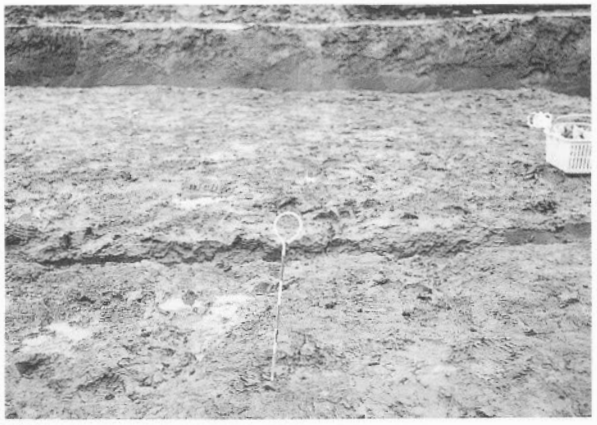
表土機械掘削状況

作業風景



基本層序

石帯出土状態

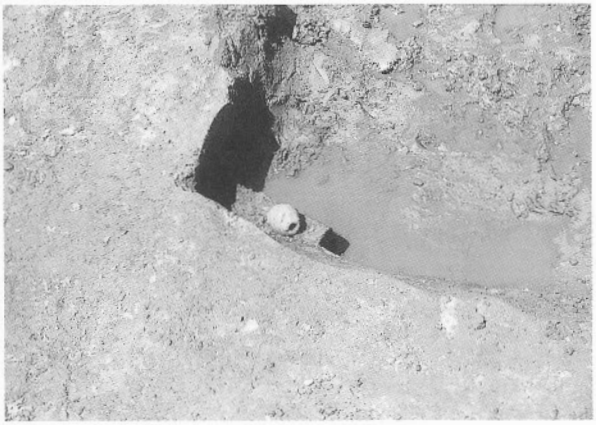


石帯出土状態（東から）

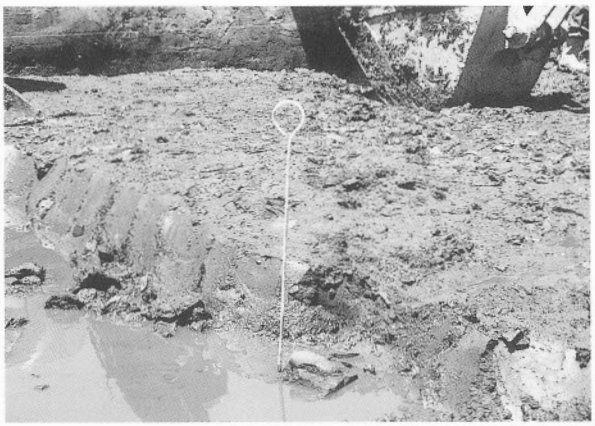
須恵器出土状態

珠洲出土状態

白黒写真図版3（A地区）

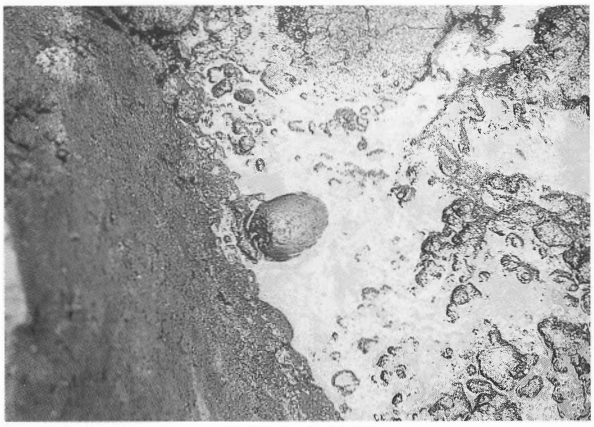


土錘出土状態



土錘出土状態

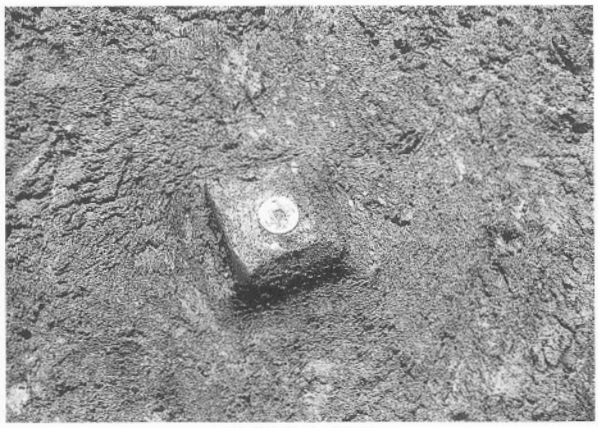
土錘出土状態



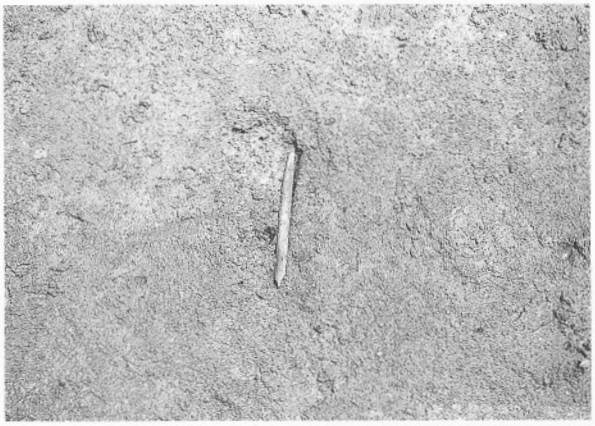
土錘出土状態

キセル出土状態

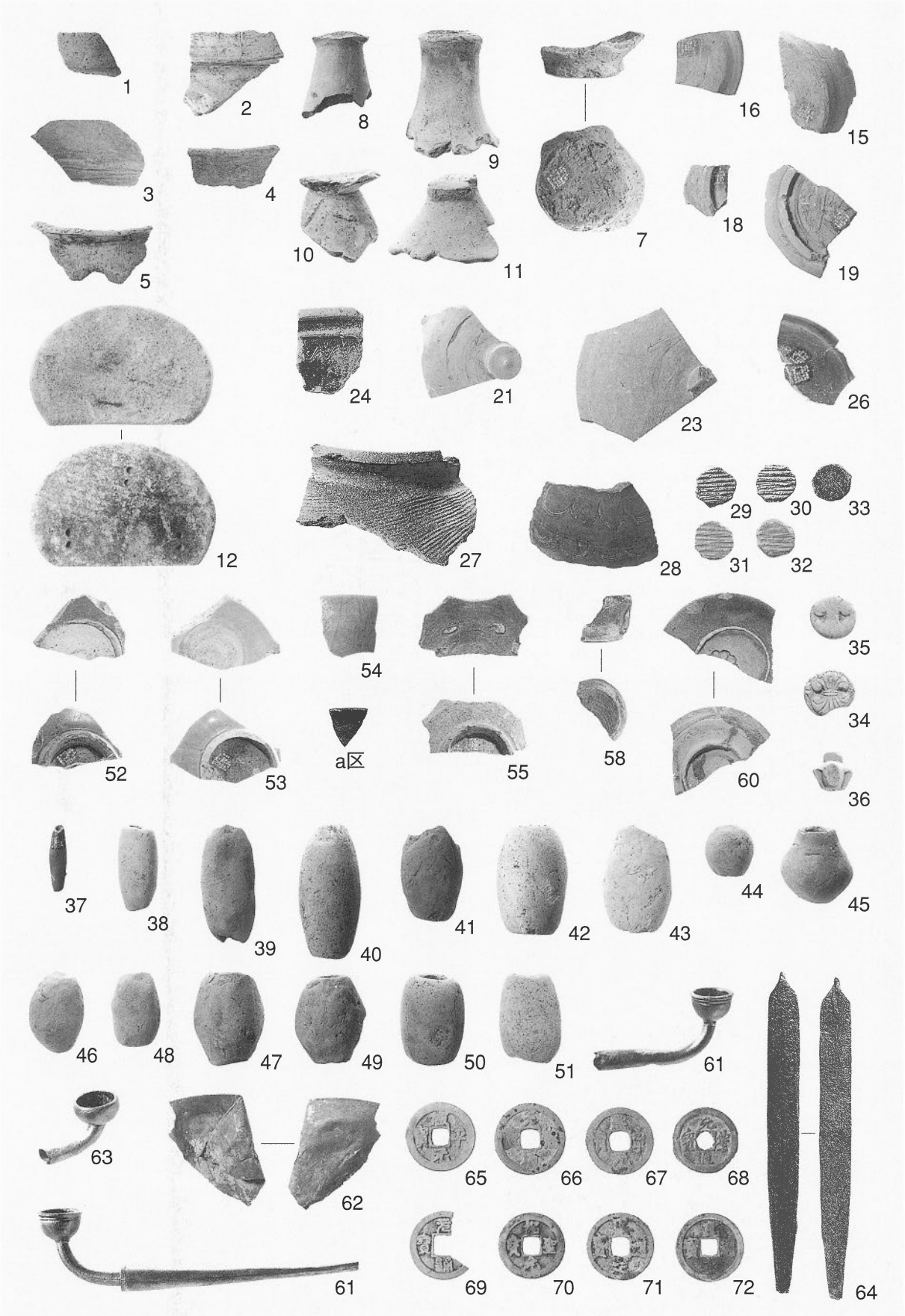
キセル出土状態



銭貨出土状態



笄出土状態



出土遺物（12は約3／4、61～72は約1／2、他は約1／4、番号は第９・10図と同じ）

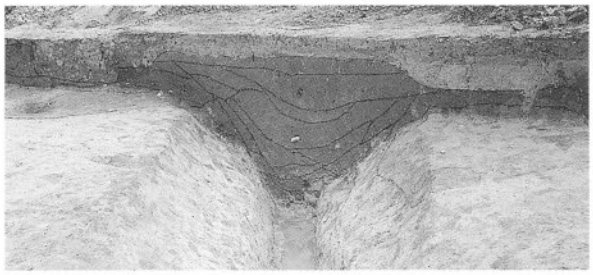
白黒写真図版5（B地区）

上部遺構（古代～中世）完掘状態（右が北）

下部遺構（弥生～古墳時代）完掘状態（右が北）

SK02　供献土器出土状態（北から）

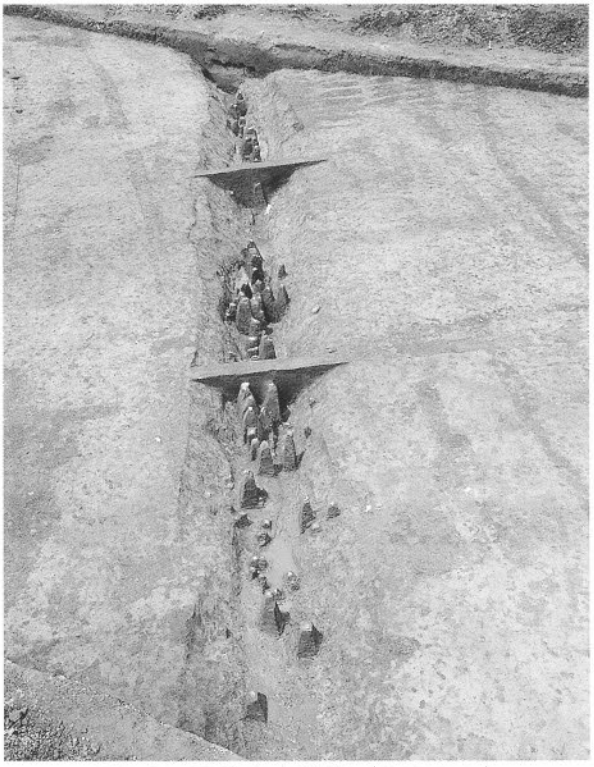
SD01　遺物出土状態（南東から）



SD04　東壁土層断面（西から）

SD04　土層断面（西から）

SD04　遺物出土状態（南西から）



SD04　遺物出土状態（北東から）

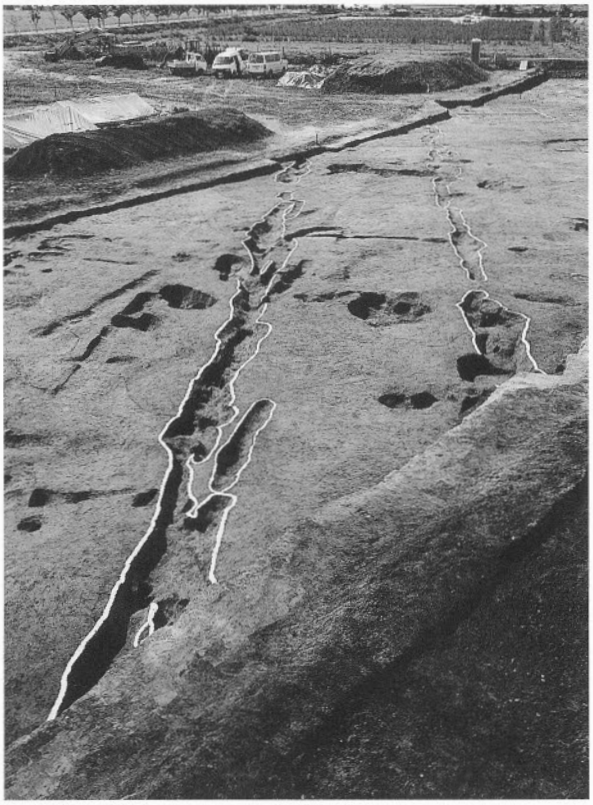
SF01　完掘状態（右が北）

上部遺構南半部　溝群完掘状態（右が北）

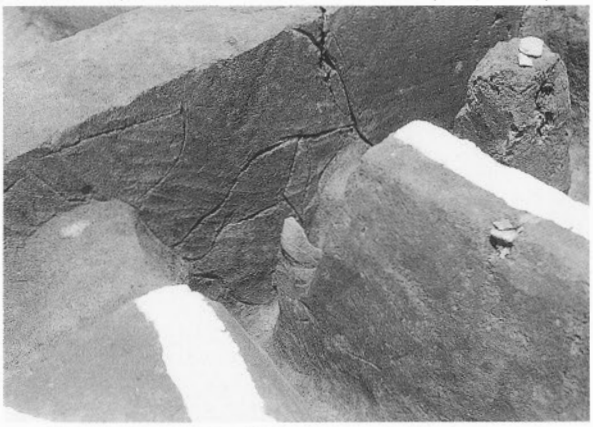
SF01　完掘状態（北西から）

SF01（SD135・136）調査区東壁土層断面（西から）

SF01（SD215・221）土層断面（南東から）



SF01　完掘状態（南東から）



SF01（SD221）須恵器出土状態（南から）

SF01（SD144）土層断面（南東から）

白黒写真図版9（B地区・古代）

SF01（SD202・SD184）土層断面（南東から）

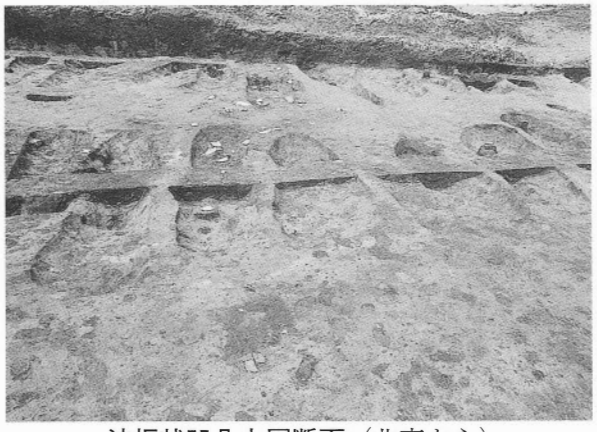
SF01（SD215）須恵器出土状態（北東から）

SF01（SD202）出土須恵器アップ

SF01（SD215）出土須恵器アップ

SF01（SD215）出土須恵器アップ

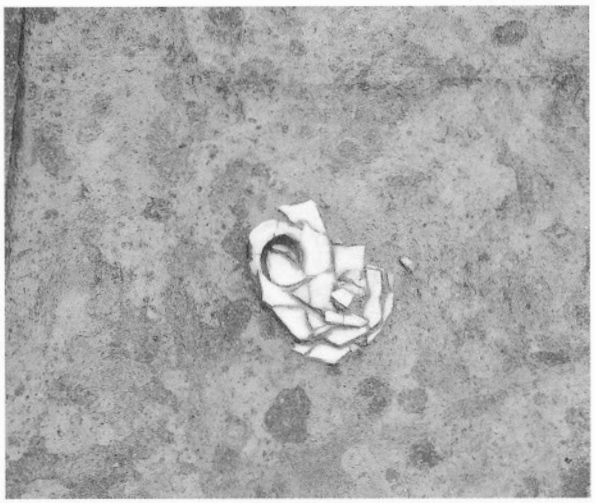
波板状凹凸検出状態（東から）



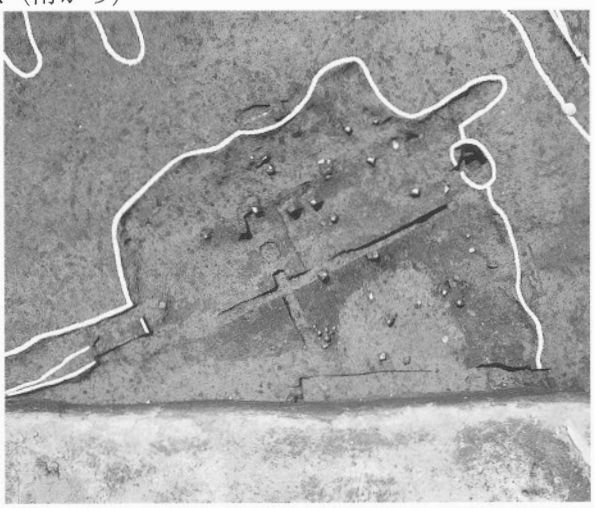
波板状凹凸土層断面（北東から）

波板状凹凸遺物出土状態（南東から）

溝群完掘状態（南から）



SD25　弥生土器出土状態

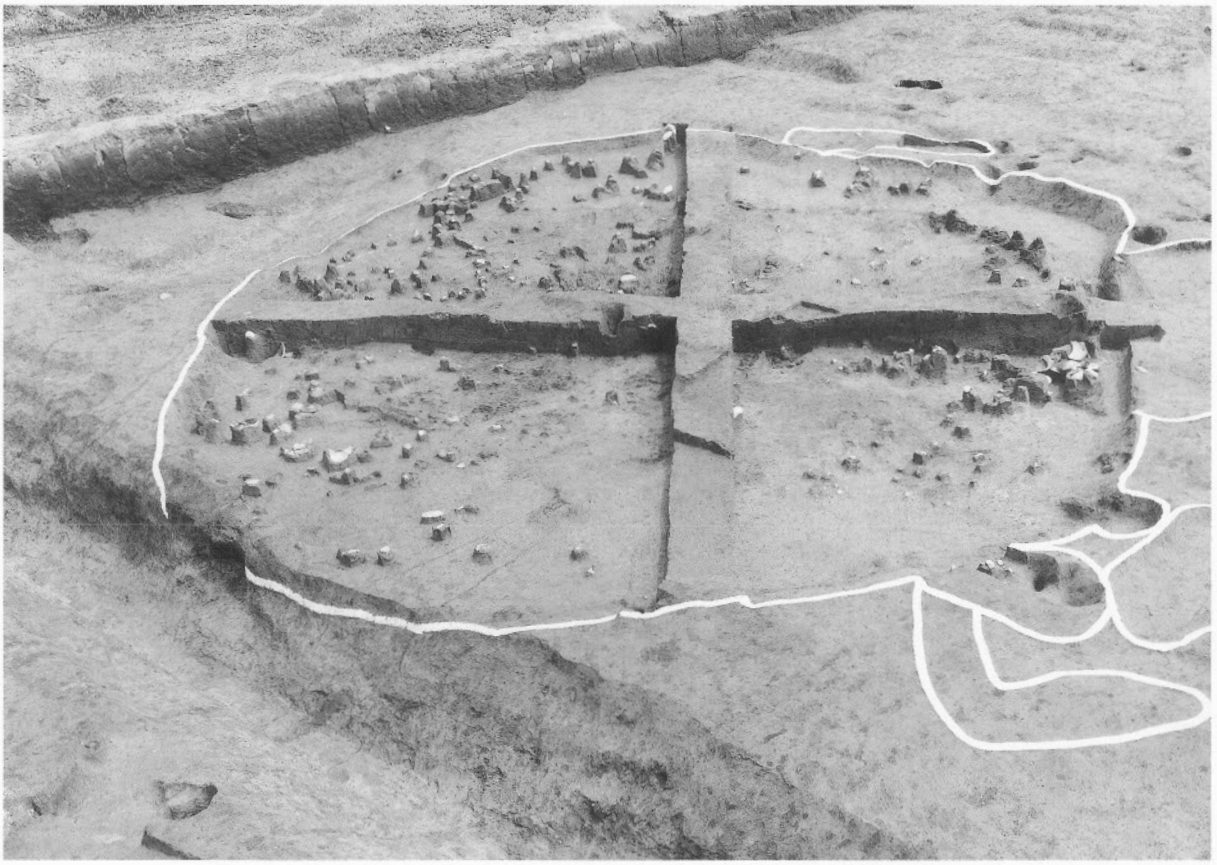


SK01　遺物出土状態（上が西）

SK01　東壁土層断面（南西から）

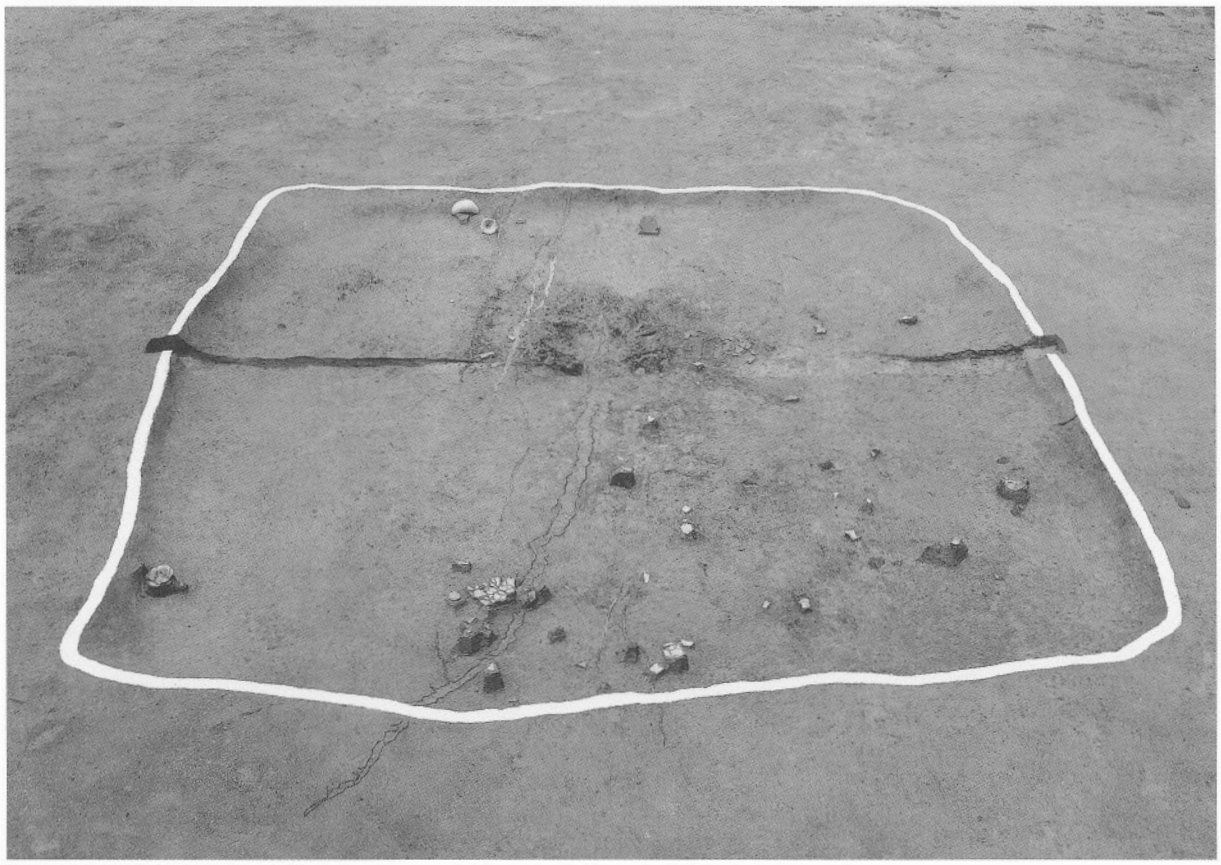
北半部居住域　完掘状態（左が北）

南半部居住域溝群　完掘状態（左が北）

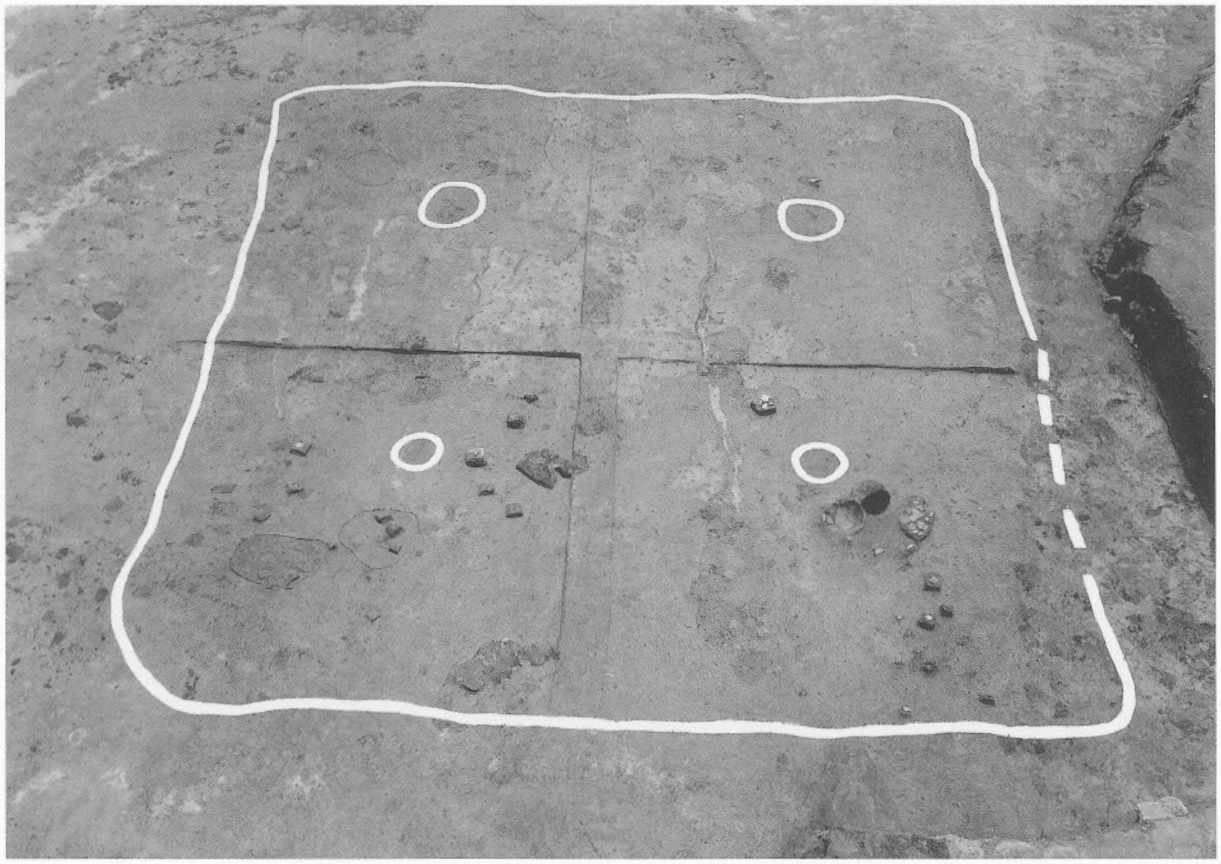


SI01（手前）覆土中層・SI04（奥）遺物出土状態（北西から）

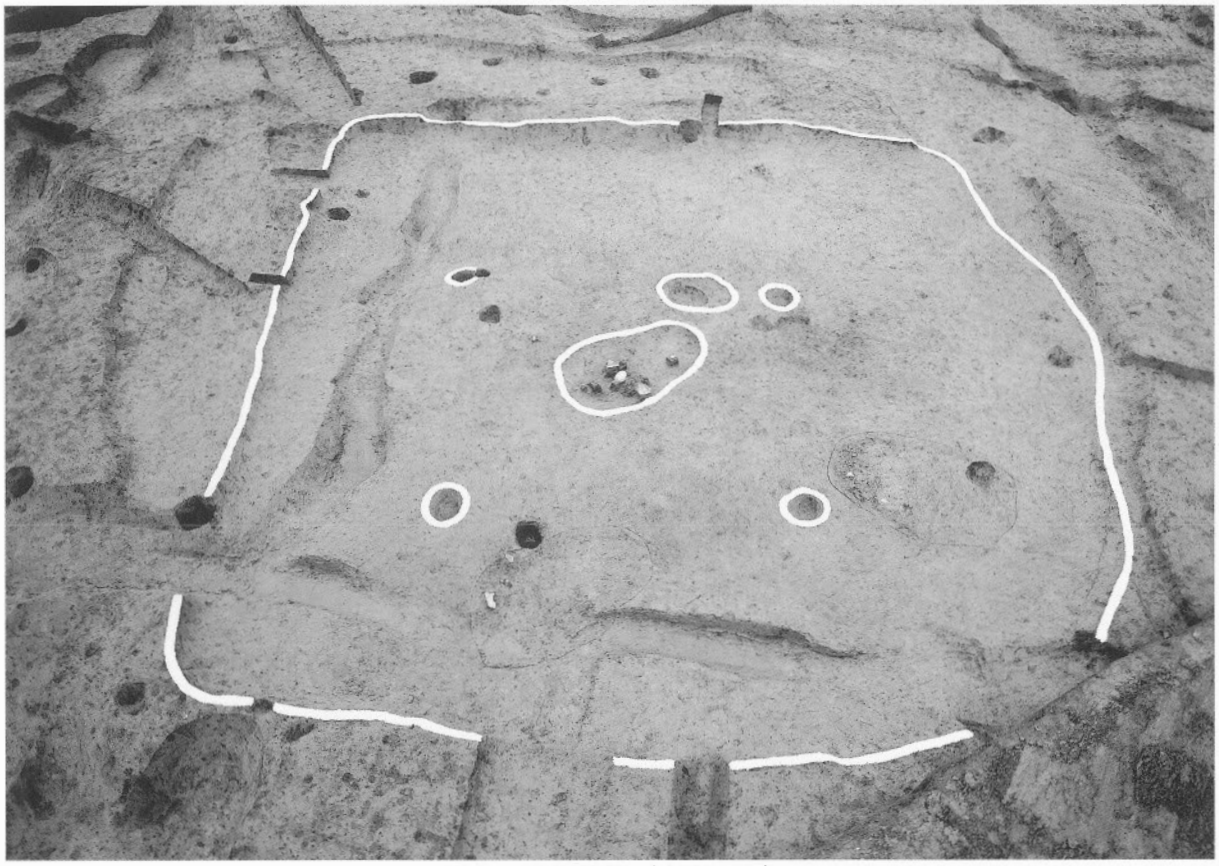
SI01（手前）・SI04（奥）断ち割り（北西から、タワーは貼床内出土遺物位置を示す）



SI02　床面直上遺物出土状態（南東から）



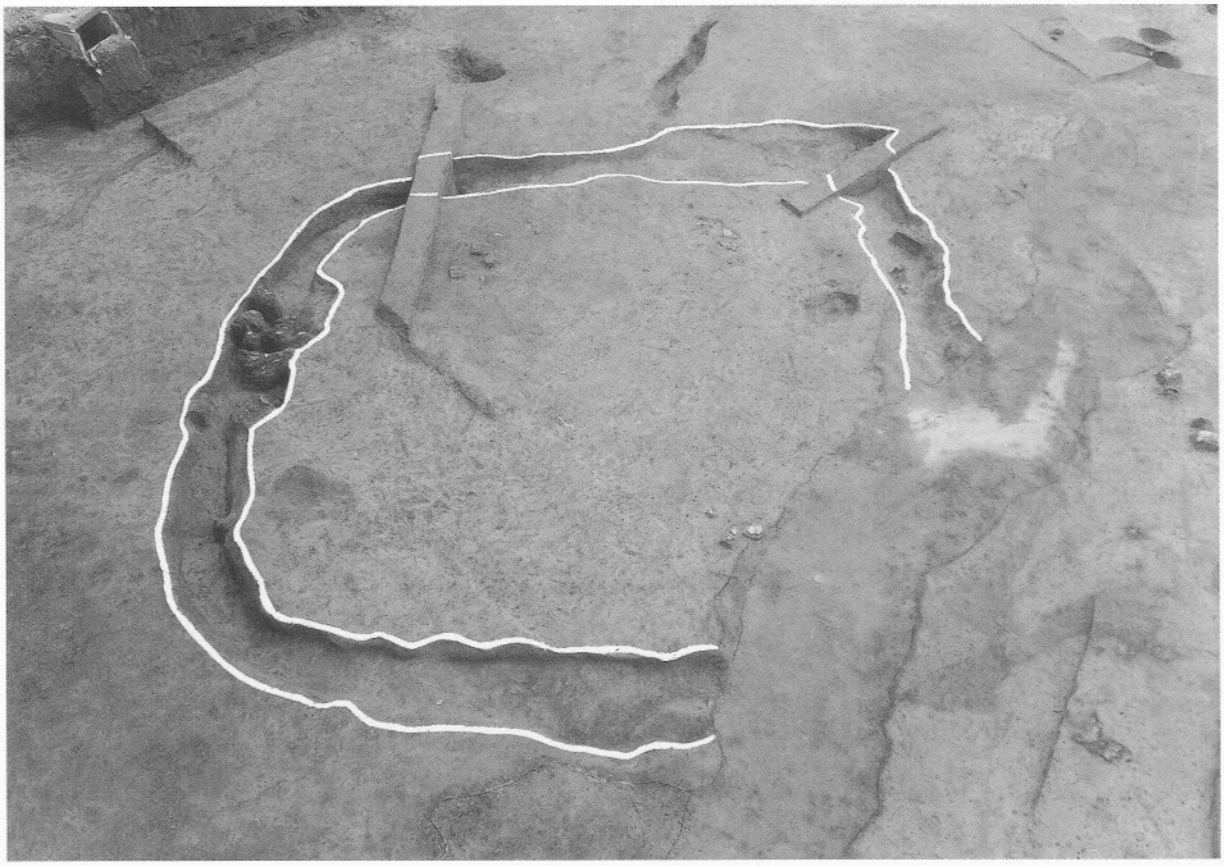
SI03　床面直上遺物出土状態（北から）



SI05　完掘状態（南東から）

SI06　完掘状態（北東から）

SI07　完掘状態（上が北西）



SI08　完掘状態（北から）

SB01　完掘状態（南東から）

SK26　遺物出土状態（東から）

SD313　遺物出土状態（西から）

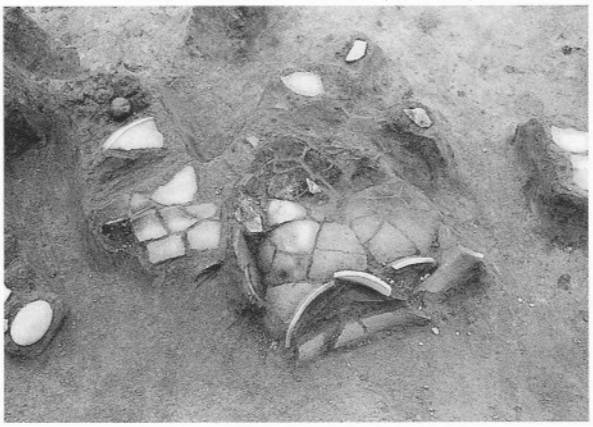
SD329（左）完掘状態・SD340（右）遺物出土状態（上が西）

SI06ーSK104　遺物出土状態（北から）

SK126　炭・焼土検出状態（北西から）

SK28　遺物出土状態（北から）

SK126　遺物出土状態（北東から）

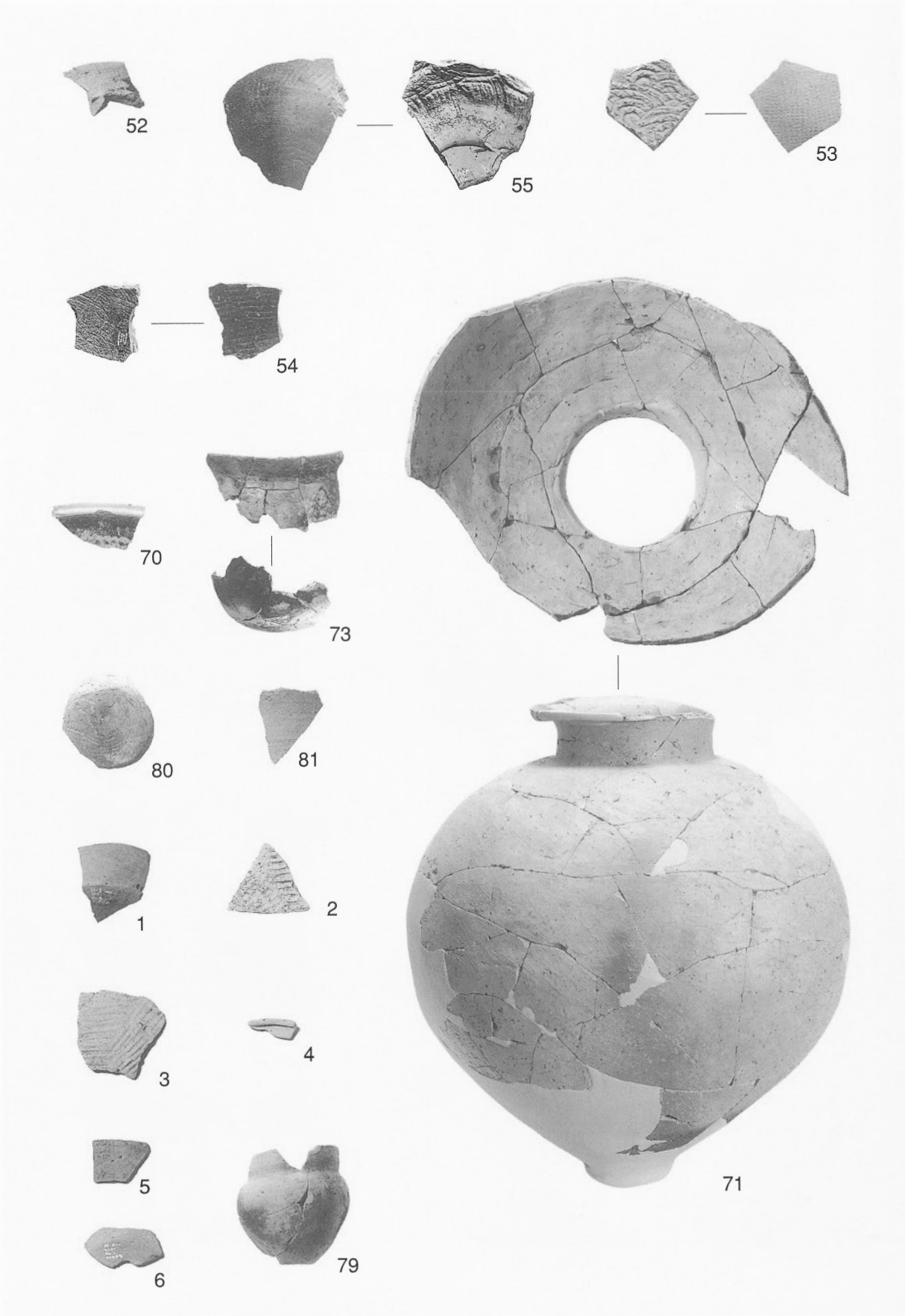


SD340　甕出土状態（南から）

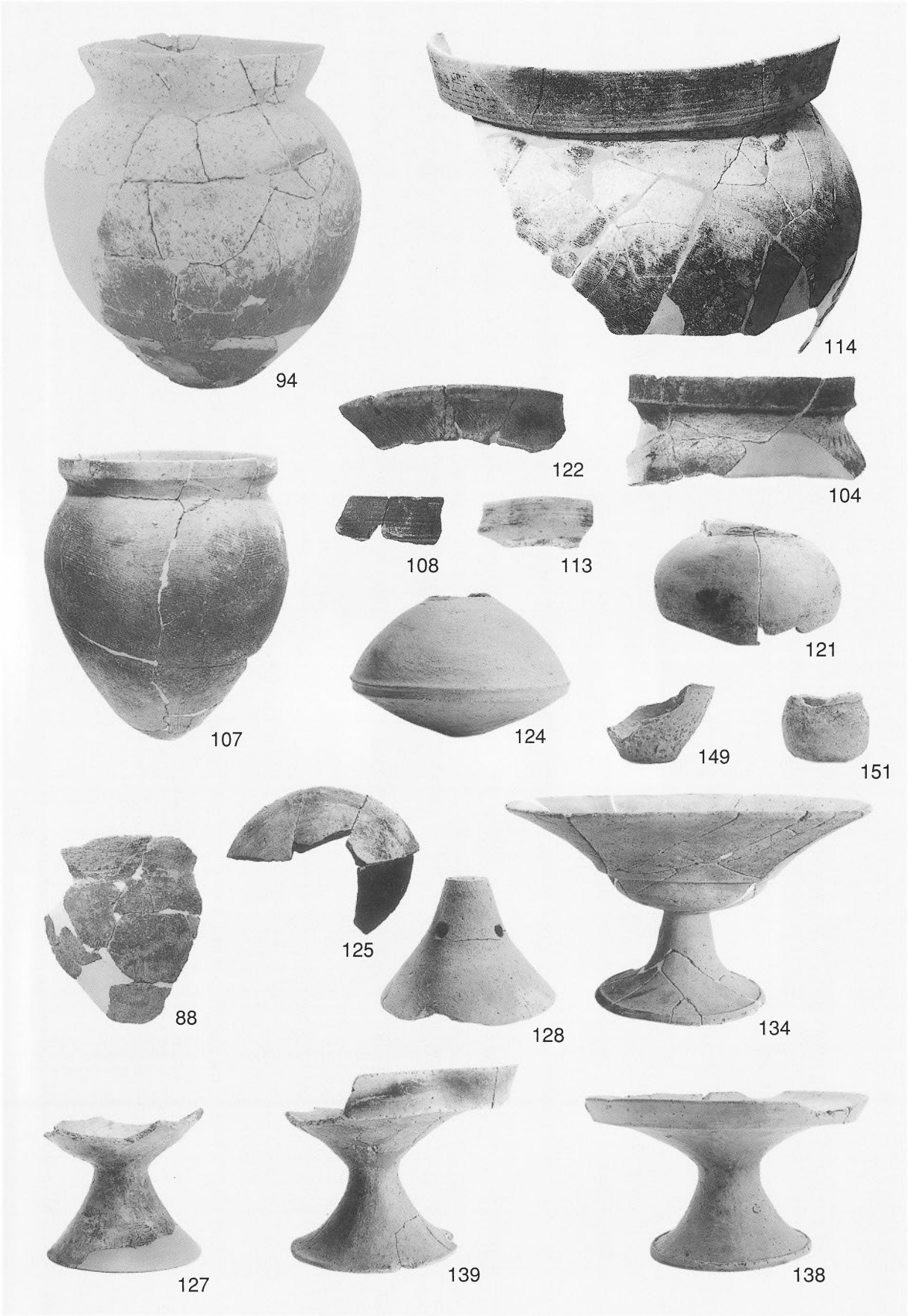
SD239　遺物出土状態（南東から）

地山中　砥石出土状態

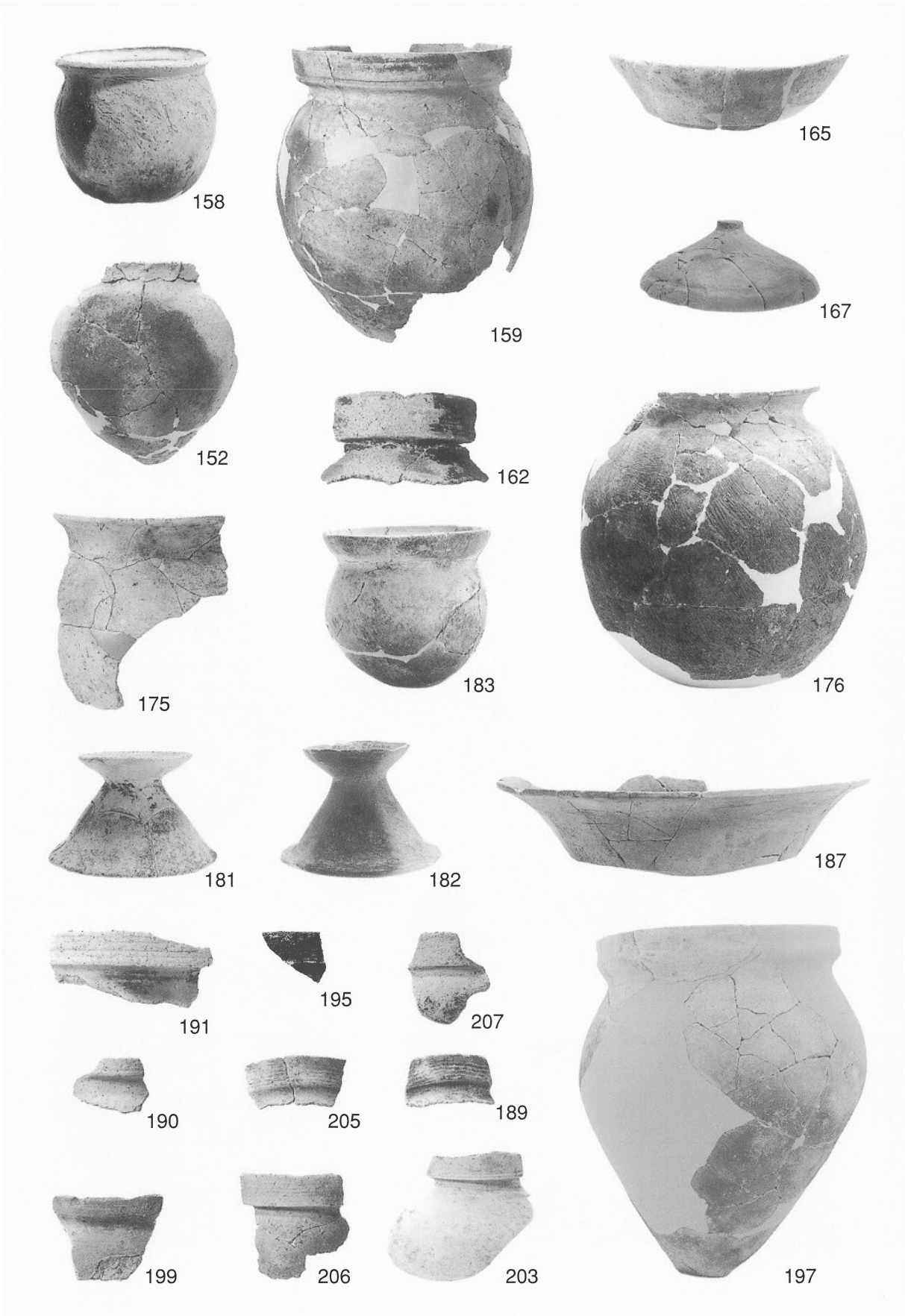
上部遺構出土遺物（約1／4、番号は第44・45図と同じ）



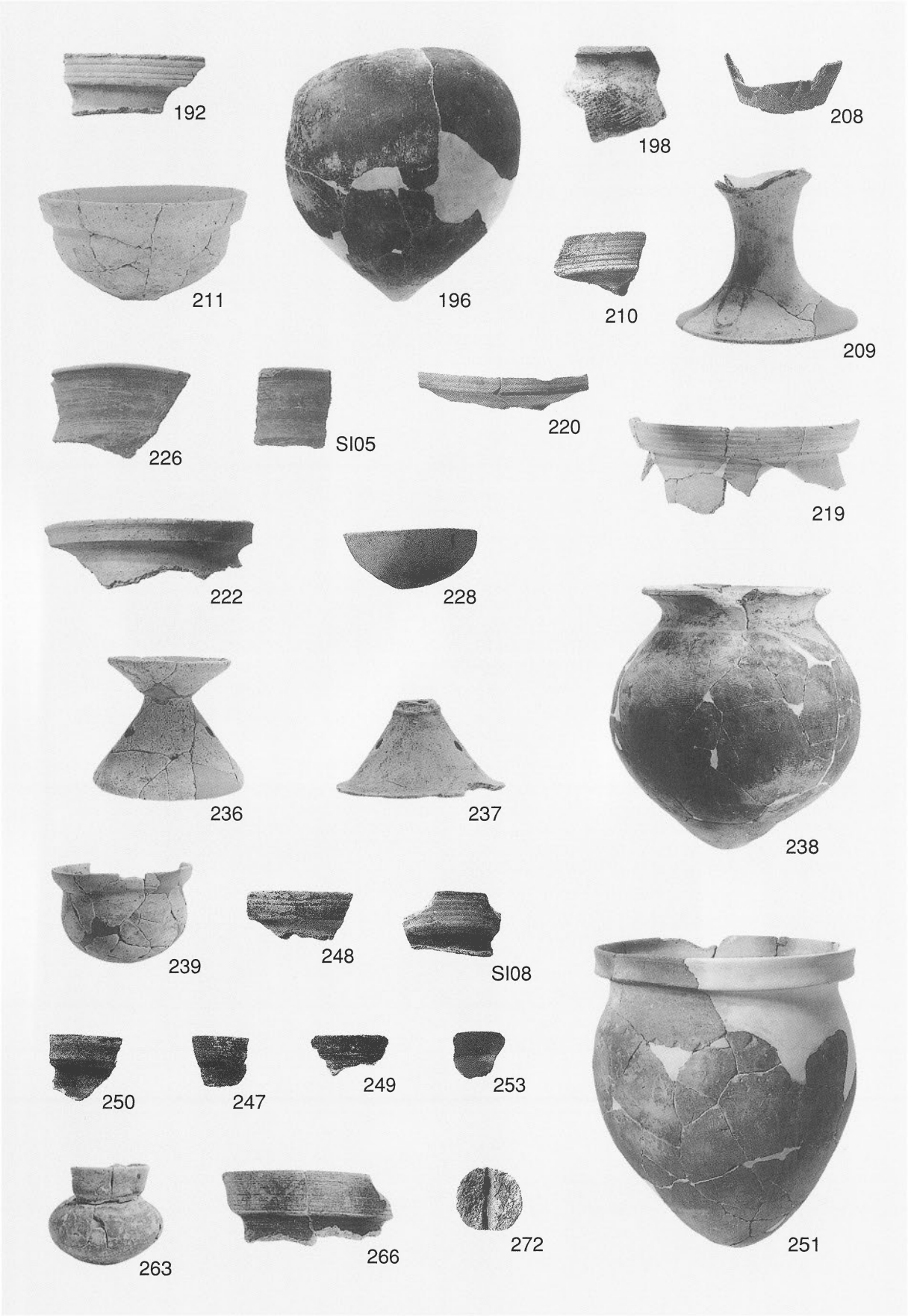
上部遺構出土遺物（約1／4、番号は第44～46図と同じ）



下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第47～49図と同じ）



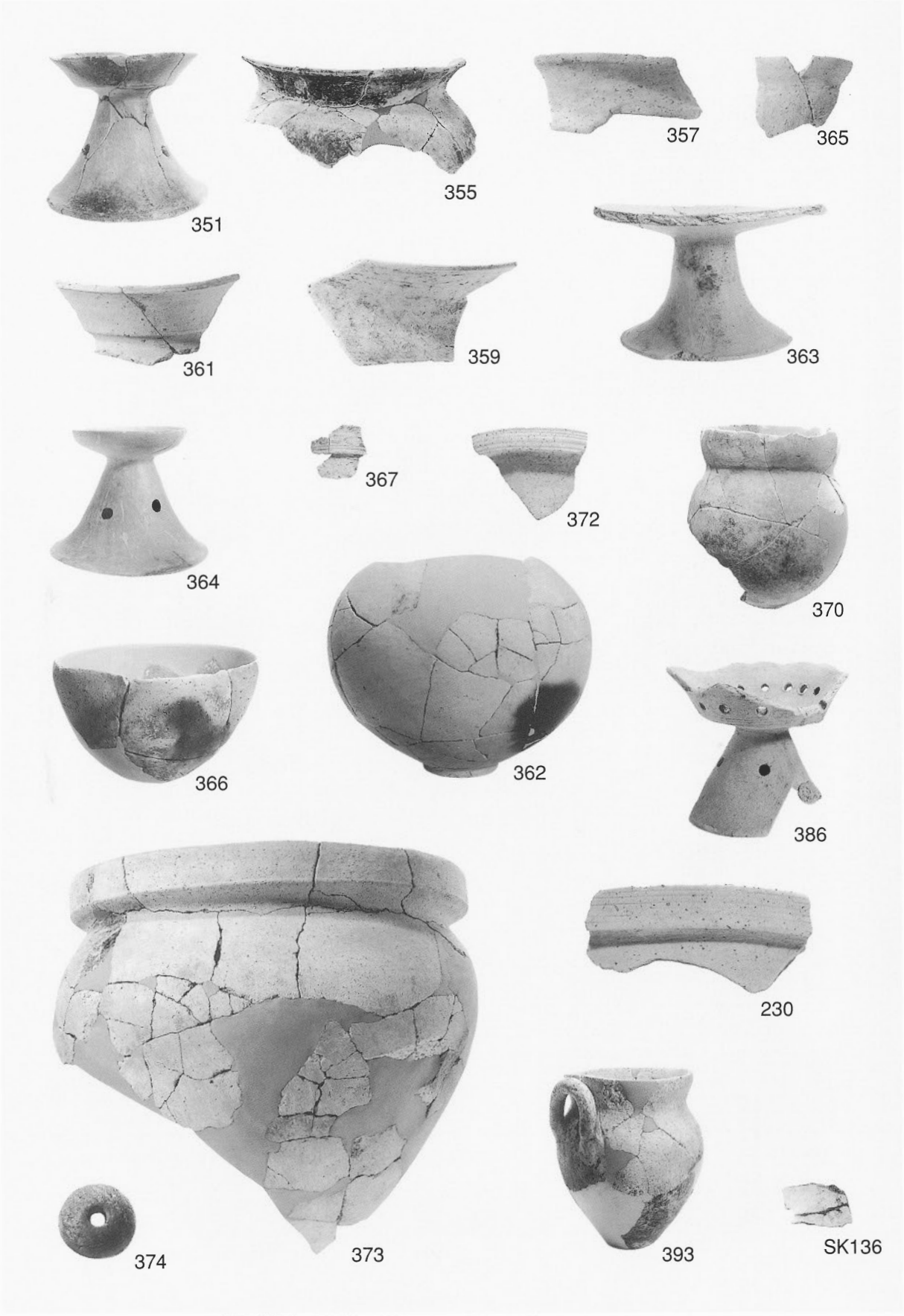
下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第49～51図と同じ）



下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第51～53図と同じ）

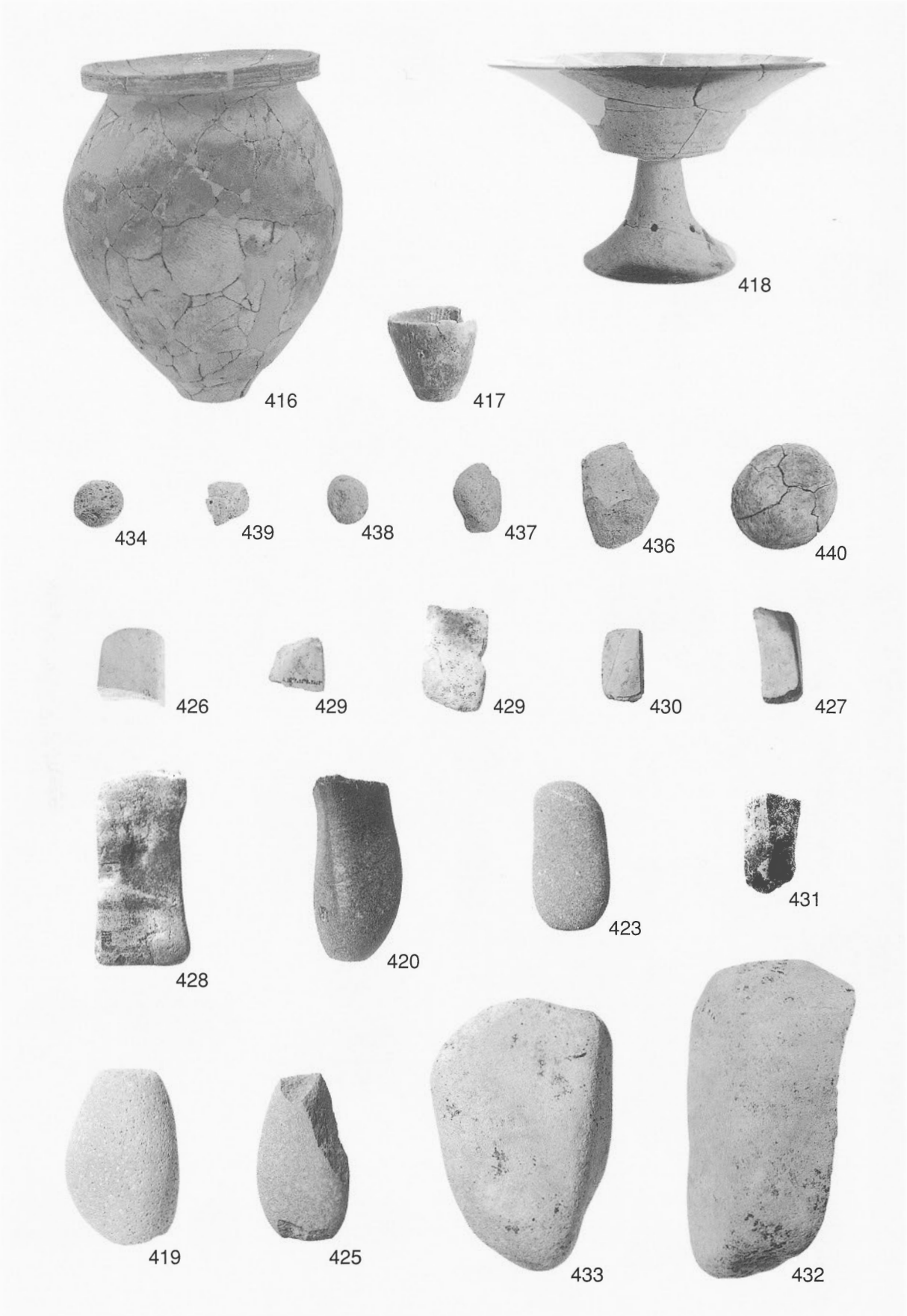
下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第54・55図と同じ）

下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第55～57図と同じ）

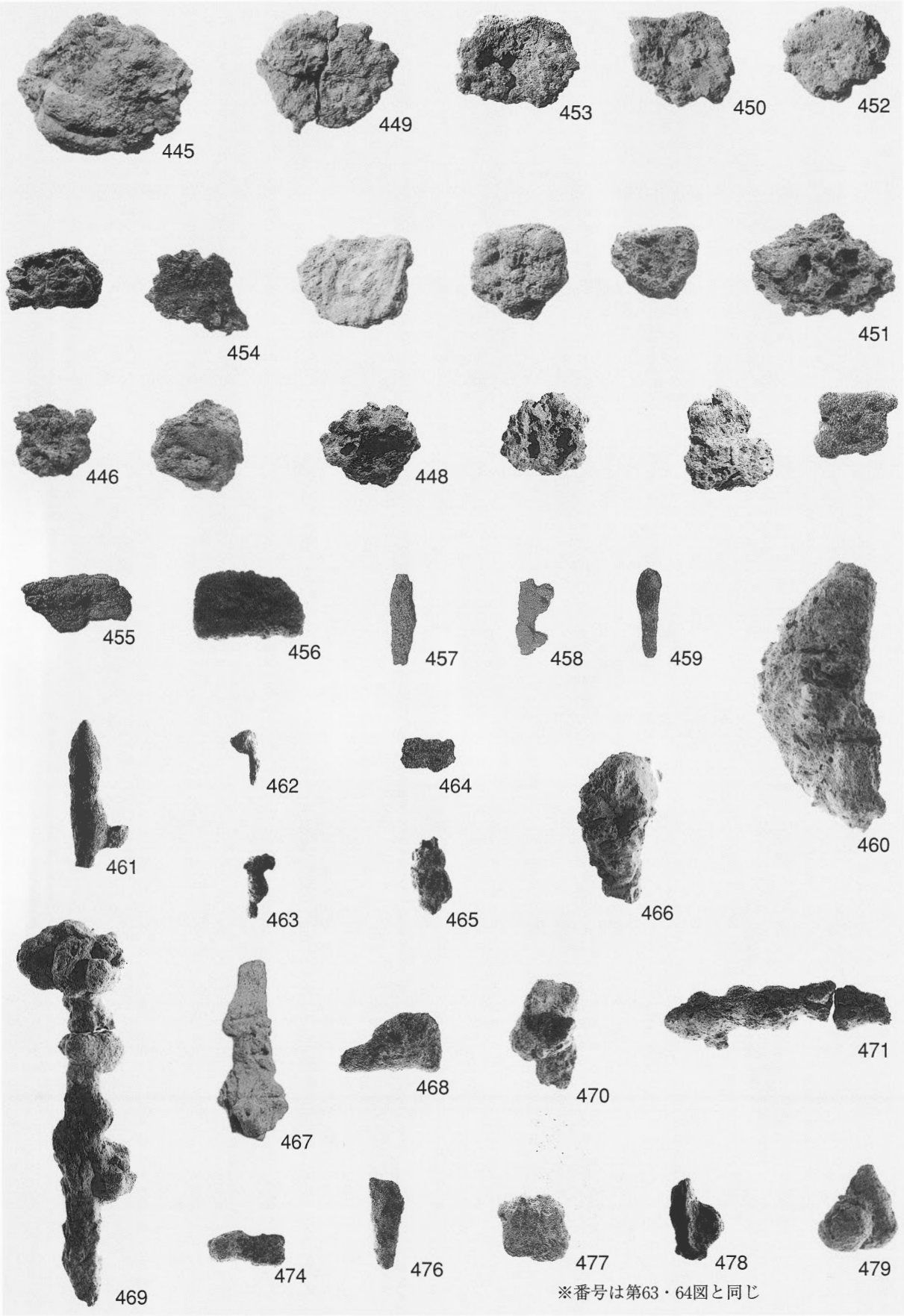


下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第57～59図と同じ）

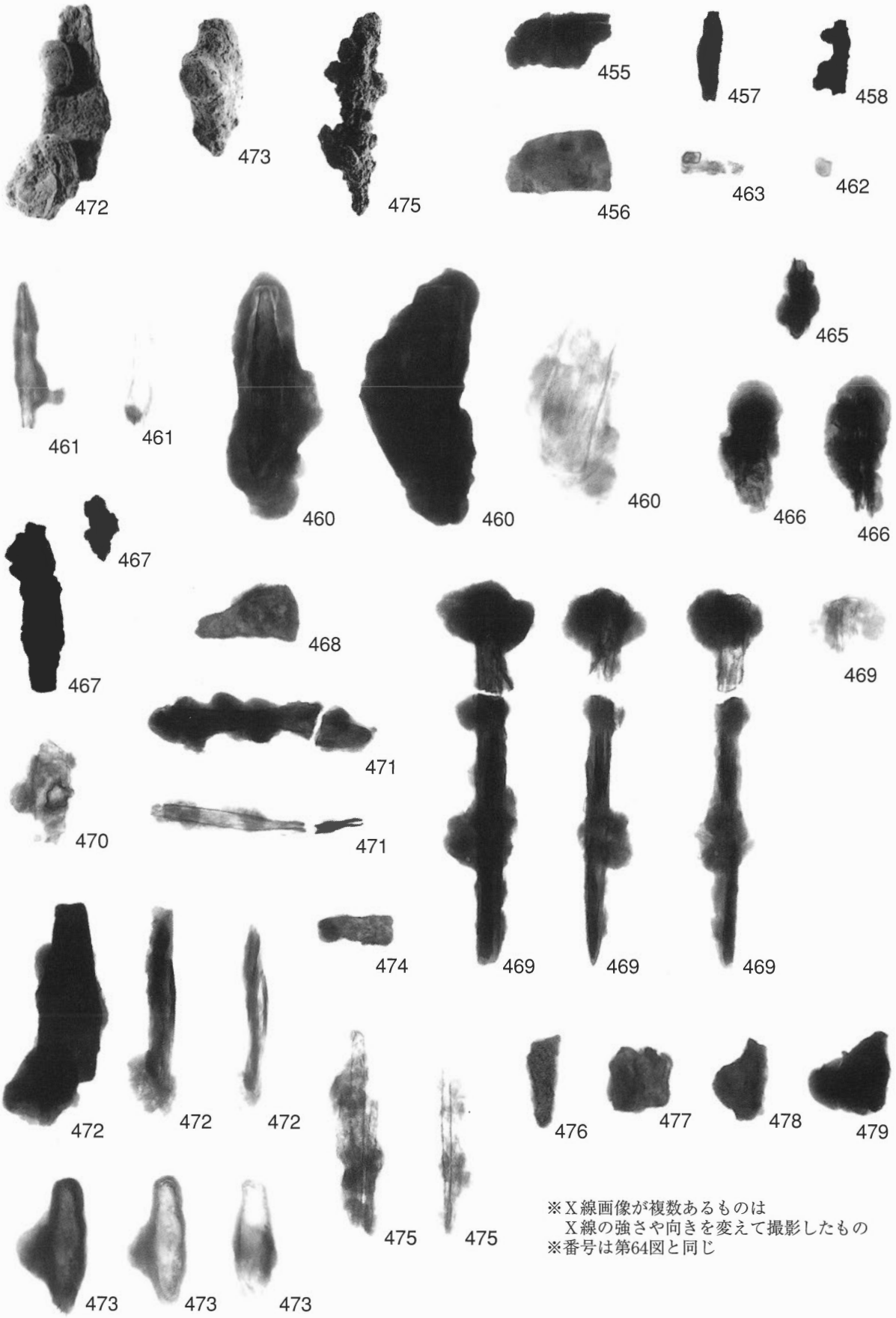
下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第59・60図と同じ）



下部遺構出土遺物（約1／4、番号は第60～62図と同じ）



SD04・撹乱出土鉄滓（約1／4）と鉄器（455～479、約1／2）



※X線画像が複数あるものは
　X線の強さや向きを変えて撮影したもの
※番号は第64図と同じ

鉄器（472～475）とそのX線画像（約1／2）

報告書抄録

ふりがな	とやまし　うちいでいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市打出遺跡発掘調査報告書
副書名	一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	7
編著者名	小黒智久・安達志津・稲垣裕二・鍋谷仁美・寒川　旭・酒井英男・岸田　徹・金井由里・浅川滋男・藤井利史
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2番24号　TEL076-442-4246
発行年月日	西暦　2006年３月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
打出遺跡（うちいでいせき）	富山市打出（うちいで）1471 外14筆	162019	201009	36度 45分 00秒	137度 11分 20秒	20040428 ～ 20041125	3,300m²	一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
打出遺跡（うちいでいせき）	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・土坑・溝・旧河川	弥生土器・土師器・鉄器・砥石・叩き石・台石・管玉・棗玉・ガラス小玉・種子・炭化米・炭化建築材	全国的にも遺存状態が良好な弥生時代終末期の焼失住居を確認した。
		奈良時代 平安時代	土坑・溝・道路・波板状凹凸・竪穴状土坑・畠・ピット・旧河川	須恵器・土師器・石帯・土錘	平安時代の直線道路（幅６ｍ）を確認した。
		室町時代	区画溝・道路・土壙墓・旧河川	中世土師器・珠洲・珠洲転用遊戯具（駒）・古瀬戸・瀬戸美濃・青磁・瓦質土器・鉄滓・羽口	
		江戸時代	旧河川	銭貨・笄・唐津・越中瀬戸・泥面子・土製品・土人形・キセル・鉛玉・鉄奨坏	

要　約

①弥生時代後期前半～古墳時代前期後半の集落、②奈良～平安時代の集落、③平安時代の直線道路、④室町時代の集落、⑤弥生～江戸時代の旧河川を確認した。

弥生時代後期前半～古墳時代前期後半にかけて、旧河川脇の微高地上に集落が形成された。弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉が集落のピークで、８棟の竪穴住居、掘立柱建物１棟、周溝状遺構３基のほか、多数の土坑や溝がある。弥生時代終末期の竪穴住居１棟は遺存状態が良好な焼失住居で、住居構造を復元する上で基準資料となる。当該期の鉄器は、富山県域では最多出土量である。旧河川の堆積土を珪藻分析した結果、河川水量の安定度が集落の消長と密接に関係していることが明らかになった。

奈良～平安時代にも微高地上で集落が形成された。畠や竪穴状土坑が確認された。平安時代には側溝心々間の幅が約６ｍの直線道路が敷設され、その構造や周辺の官衙関連遺跡との位置関係から、官道と考えられる。

室町時代には、区画溝や土壙墓が確認され、本調査区は集落の縁辺部に相当することが判明した。中～近世の旧河川は川としての機能を失い、埋没過程にあった。

弥生時代後期前半～古墳時代前期後半の土器が大量に出土し、その様相は旧河川を挟んだ対岸の江代割遺跡と類似している。

富山市埋蔵文化財調査報告７

富山市打出遺跡発掘調査報告書

―一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告―

2006（平成18）年３月17日発行

発行　富山市教育委員会
編集　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町１丁目２番24号
Tel　076-442-4246
Fax　076-442-5810
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷　越浜印刷株式会社
〒939-8214
富山市黒崎625
Tel　076-425-0283
Fax　076-429-5377